

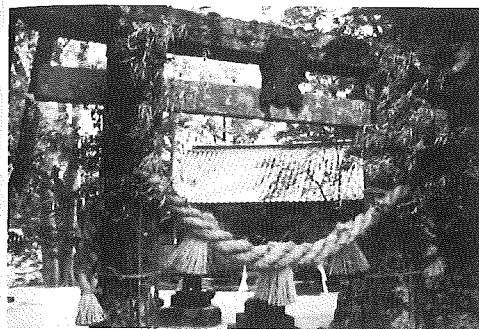


龍造寺隆信像

た。胤連は龍造寺隆信の支援をうけていた。この直後、胤頼の弟の兄冬尚も龍造寺勢の攻撃をうけ、神埼城原で敗死した。ここに少弐氏は事実上滅亡した。

一方胤頼の子胤誠は、龍造寺氏と対立しながらも少弐氏を擁立しようとする神代勝利を頼って、小城を離れ山内に移住した。なお、千葉氏の家人として岩部・原・金原・栗飯原・中村・円城寺・飯笹など下総国のおもに千田莊（現千葉県香取郡多古町・栗源町）を本拠とする氏の名がある。富士町内の市川や鎌原に多い「飯笹」家は、下総より下向して千葉氏に仕官し、千葉胤誠とともに山内に移った一族ではなからうかと想像される。

また、西千葉家の胤連はのち鍋島氏の配下となり、文禄二年（一五九三）に死去している。胤連の子胤信は龍造寺作兵衛、そして鍋島忠右衛門と改名し、子孫は鍋島姓を受け継ぎ、代々佐賀藩の着座として重責を担っている。



諏訪神社（市川）

三 戦国時代

（一）山内の諸郷士

中世になると山内の諸地域の開発も進み、他地域より来着し山内に根を降ろす者も出てきた。しかし、現富士町域に來住した有力者を古文書という記録で確認することは困難である。多くは伝承として残っているにすぎない。だが敢えて伝承の類も含めて、神代氏入山以前の中世の諸郷士をあげてみたい。

山内の諸郷士

東松浦郡厳木町天川の千葉嶋太郎氏所蔵の『野中家文書』（写本）によれば、野中氏は仁治三年（一二四二）小城に居住した小城郡の惣地頭（230頁参照）千葉氏の代官として小城郡晴氣を預り、同時に市川も所領とした。同家の野中伊賀守が信濃諏訪大社の分霊を勧進して諏訪神社を創建したと伝える。一五世紀末より大内氏の肥前侵攻により、少弐方である小城千葉氏も衰亡状況に陥ってきた。市川に蟄居した野中和泉守胤広は御居拝処の泉州軒を吉祥山西福寺とし、同氏の菩提寺とした。西福寺はもと小城の晴氣にあったが、寛文三年（一六六三）現在地に移転した。西福寺の裏山には少弐高経を祀る若宮大明神がある。

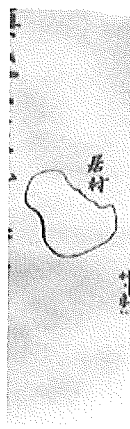
中原の正念寺は天正の頃（一五七三〜九二）松隈藤四郎が開基したという。松隈氏は元來志摩半島（福岡県前原町）に勢力をもつ一族で、時期は不明だが摩那古に入山してきたという。松隈氏の後裔の活動は『正念寺文書』（現在は県立博物館寄託）で確認できる。

大串の天穂山光照寺は、慶長年間（一五九六〜一六一五）に蛸久天満宮（現佐賀市鍋島）の社職で、佐賀の城下町づくりに尽力した右近刑部の叔父慶念（浄慶）が、右近氏の旧知行地であった大串に庵室を建てたのが始まりであるという。つまり右近氏が大串を知行した経緯を知ることができる。

さらに『三瀬村誌』によれば、嘉吉二年（一四四二）淡路国より杠日向守が三瀬に来住し、上杠に館を構えた

野中系圖 平姓

野中氏者關東千葉一族支圖下統
後越前推名領号祖名又野中莊
分領改野中仁治三年千葉時胤上
代官千葉領肥前國小城郡時系保下
市川村とす



『野中家系図』（写本）（厳木町天川、千葉嶋太郎氏旧蔵）

しかし、『富士町誌』によると、小城の千葉氏の内紛で敗北した東千葉家の胤頼の子胤誠は市川に蟄居し、神代氏に依っている。野中氏はこの胤誠の子孫であると記述されている。なお、千葉胤誠は杠左衛門大夫や同左馬大夫に書状（今のところ計三通を確認）を発給しており（『杠家文書』県史料集成第一七巻）、山内での活動を証明できる。

『三瀬村誌』によると無津呂山城主として賀（嘉）村氏がいる。賀村讃岐守——賀村和泉守——賀村丹後守

藤原鎌足八世孫、藤原秀郷八世從五位下左近衛尉行高、文治三年（一一八七）近江国神埼郡常富莊賀（嘉）村四世孫嘉村俊行弘安二年（一二七九）千葉胤貞肥前国小城郡下向の時、從つて下向、その休息処として摩那古村大野坂に築城して住し、俊行十七世孫嘉村新左衛門に及び一族門葉多し、

とあり（出典は不明）、嘉村氏が近江国から來着したことを示している。摩那古の祥雲山円徳寺は、弘治元年（一五五五）神代勝利と戦つて滅んだ一族のために嘉村龍清（行高の後裔）が、永祿年間（一五五八〜七〇）に廢寺を再興したものという。この件は神代勝利を山内の総大将にすることに反対する勢力があつたことを示すものとして興味深い。

権現山の北山腹に鎮座する白山神社は、関屋源八郎義家が永延二年（九八八）に加賀国の白山権現の分靈を勧進したと伝えられている。

栗並の子安神社は、栗並村地頭栗並因幡守子孫永久の大願で承久年間（一二一九〜二二）の頃勧進されたという。

古湯地区には原氏の入山伝承がある。南北朝初期菊池武光の從者原隼人（阿蘇大宮司惟直の一族）が古湯に來住したという。貝野にある城山は同氏の城跡という。しかし、史料的には確認できないが、ともかく原一族は古湯の名家であり、淀姫神社の境内にある「九郎さんの碑」の前で、九郎さん祭りをするのを恒例としている。

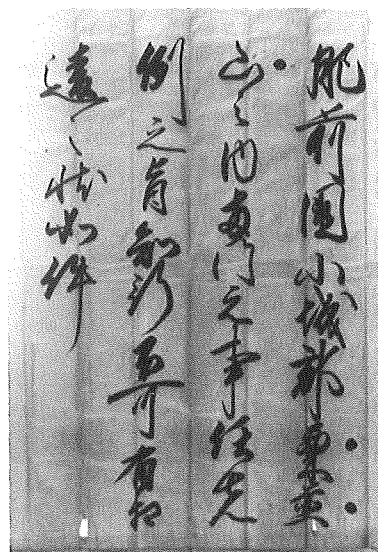
大野にある春日神社（経津主命を祭神をする）は、後土御門天皇の頃（一四六四〜一五〇〇）小城郡一四カ山の地頭の野辺田豊前守藤原朝臣政房が勧進したと伝えられている。

古湯に鎮座する中山神社の社伝によれば、弘治・永祿の頃（一五五五〜七〇）この地に來住してきた足利氏一族の細川頼高の家人嘉村某が勧進したという。

中原の正念寺は天正の頃（一五七三〜九二）松隈藤四郎が開基したという。松隈氏は元來志摩半島（福岡県前原町）に勢力をもつ一族で、時期は不明だが摩那古に入山してきたという。松隈氏の後裔の活動は『正念寺文書』（現在は県立博物館寄託）で確認できる。

大串の天穂山光照寺は、慶長年間（一五九六〜一六一五）に蛸久天満宮（現佐賀市鍋島）の社職で、佐賀の城下町づくりに尽力した右近刑部の叔父慶念（浄慶）が、右近氏の旧知行地であった大串に庵室を建てたのが始まりであるという。つまり右近氏が大串を知行した経緯を知ることができる。

さらに『三瀬村誌』によれば、嘉吉二年（一四四二）淡路国より杠日向守が三瀬に来住し、上杠に館を構えた



千葉胤連知行安堵状 (『杠家文書』)

とあり、小城の千葉胤連が山内の杠氏に知行を安堵している。史料中の「門」とは山内の交通路を固める関所のようなものと考えられ、杠氏は山内の交通路支配のおさえて存在していたことがわかる。この史料により小城の千葉氏の勢力も山内に及んでいることを証明している。

以上神代勝利入山以前の山内支配の様子を現存する史料

とある。史料中の「布類井」は古湯に間違いないと考えられるので、少貳政尚の孫冬尚も杠氏に対し主導的立場にあったことを示している。

続いて同文書の「千葉胤連知行安堵状」によると、

杠主馬丞殿

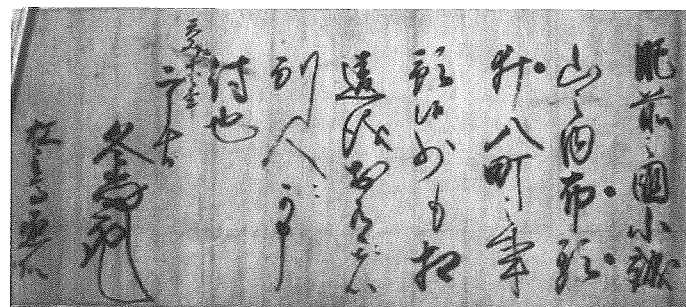
冬尚 (花押)

肥前國小城郡栗並山之内両門之事、任先例之旨、知行不可有相違之状、如件

二五四九
天文十八年六月廿一日

杠主馬允殿

胤連 (花押)



少貳冬尚知行預状 (『杠家文書』)

と記述している。同氏の後裔は代々この地を拠点として山内に勢力を広げている。『杠家文書』の「少貳政尚知行安堵状」には、

肥前國神崎庄之内、杠山兵部少輔跡之事、任先例之旨、知行不可有相違之状、如件
二四七三
文明三 九月廿四日

杠日向守殿

政尚 (花押)

とあり、下向後三〇年経過した杠日向守に少貳政尚が知行安堵状を渡している。このことは杠氏が山内でも有力な郷士に成長していることを物語るものである。少貳政尚が大内氏に追われて、龍造寺氏を頼って佐賀に本格的に拠点を移すのが文明十四年(一四八二)であるので、少貳政尚はそれよりも一〇年以上前より山内郷士に対し主導的役割を果たしている。この史料は少貳氏と山内との関係を知る上で特に貴重なものである。

また同文書の「少貳冬尚知行預状」によれば、

肥前之國小城山之内、布類井八町之事預候、少も相違儀於有者、別人可申付也
二五四五
天文十四年二月十日



神代氏の軍旗

神代良忠は文永十一年（一二七四）の文永の役に際し、増水した筑後川に舟を調達して仮橋を架けて軍勢を無事渡河させた功績により、鎌倉幕府の執権北条時宗より感状を賜っている。

良忠の子良基は元弘三年（一一三三）少貳方につき、鎮西探題北条英時と戦い勝利を得た。その三年後足利尊氏が九州へ敗走してきた時は、高木氏・松浦党らと同じく足利方の軍に加わって奮戦し、軍功をたてた。足利尊氏は良基に康永二年（一三四三）十一月九日に、筑後国三井郡櫛原八〇町の地頭職を与えた。

その後神代対馬守勝元までは所領の異変もなく、代々近国所々で戦功をあげ、神代の家名も著名であった。

戦国時代の初め、筑後には蒲池や西牟田らの諸氏の勢力が拡大され、勝利の父宗元はそれらの勢威に抗しきれず明応年間（一四九二～一五〇〇）の頃、本領を離れ流浪の身となり、二七人の士（神代二七衆）を従えて上松浦郡の波多氏にいささかの縁があるのを頼つ

により分析すると、やはり少貳氏を筆頭とし、少貳氏の配下にあった千葉氏が影響力をもっていたことがわかる。であれば佐賀・神埼・小城方面の平野部とほぼ同じ支配構造であったと判断してよい。

だが富士町（特に旧北山村域）は昭和三十年代までも唐津・浜玉方面との関係が密であった。また、福岡県側とのつながりも密であったので、双方の生活面・商業的な面での相互連携は説明できるが、政治面での影響を文献上に明らかにしてくれるものが発見されていない。

（二）神代氏と勝利の入山

江戸期佐賀藩の親類四家のうち一家である神代家は、佐賀平野北部の山内（現富士町・三瀬村・脊振村など）を領有した戦国武将神代勝利にはじまる家系である。

『神代家伝記』により神代家の祖先を尋ねると、神武天皇から八代の孝元天皇の第三皇子の孫が武内宿禰で、神代家はこの武内宿禰に始まるという。宿禰は神功皇后の新羅遠征の際皇后の副將軍として出征し、その武略や智謀は臨機応変自在にして恰も神のようであった。皇后は喜悅し、「神に代わる」という意で「神代」の二字を授与されたという。それ以来宿禰の後裔は家名を「神代」と定め、賜った筑後国三井郡の神代村に居住し、子孫代々継承してきた。同家は久留米市に鎮座する高良神社の社家（宮司）を勤めている。家紋は立龍木瓜で、応神天皇の時三頭左巴の紋も許されたという。文書には家号を「武辺」と書いた。勝利以前の神代氏の略図系を示すと（274頁参照）、

孝元天皇 第三王子彦太忍命——武内宿禰……神代良光——良忠——良基——道元——勝元——宗元——利元（福島）

「勝利」



三瀬城本丸跡の勝玉明神石祠

中国の神仙譚を下敷きにした創作であろうが、新次郎が北山から有明海までを支配する。つまり肥前を制覇する大望を持っていたことを示す逸話である。若きころの勝利の風貌がうかがえる。

山内は溪谷・小盆地が数多く点在し、各小盆地は山や峰によって隔られていて、全体的・政治的なまとまりはなかった。しかし、全国が下剋上の風潮に覆われた戦国乱世となつてからは、外部勢力の侵攻がいつあるかもわからない不安な状態となつてきた。そこで心ある武士は山内団結の必要

福島兵部大夫の遺跡を継ぎ、福島周防守利元と名乗って勝利に家臣の礼をとった。

幼少より剣術に秀れていた新次郎は、大永四年（二五二四）一四歳の時、諸国遍歴の武者修行に出た。『北肥戦誌（九州治乱記）』と『神代家伝記』によると、小城の千葉興常に扶持されていた新次郎は、同家に仕えていた江原石見守と寝起きをともにしていた。ある夜江原石見守が夢をみたという。その夢は「自分の身体がどんどん大きくなり、北山を枕とし、南海に足を湿し、波に洗われたという。吉夢だろうか、凶夢だろうか」という。新次郎は「それはお主にふさわしくない凶夢であるから、自分が引き受けよう」と、自分にその夢を是非売ってくれと石見守に依頼した。新次郎は金鉤匙を石見守に渡して夢を買い取ったという話を記載している。この話は

て肥前に入った。上佐賀の千布村（現佐賀市金立町千布）を通っていた時、千布の領主陣内大和守利世のもとに一時身を寄せることになった。

日を経て陣内大和守は、最愛の娘（桂娘）を宗元に勧めて婿に取り、領地を与えて宗元を千布村の住人とした。この宗元と桂娘の間に、新次郎（のちの勝利）が永正八年（一五一一）千布館で誕生した。成長した神代勝利は遂に山内の盟主となる。

『実相院文書』によると、神埼郡本告郷（現神埼町）の与止日女社領を神代対馬入道（宗元）が違乱した趣が、年未詳の十一月一日付少貳政資の実相院宛て書状写に見えるので、政資の在世中には既に神代宗元は肥前に定着していたのである。その時期は少貳政資が大内勢に攻められて多久で自害するのが明応六年（一四九七）であるから、宗元はそれ以前に身を寄せ、佐賀の地に勢力を植えていたのである。

ところで山内とは、脊振山地の南麓から小城郡天山の北麓にわたる東西七里（二八キロメートル）、南北五里（二〇キロメートル）の山谷を指している。山内二六ヶ山（山とは主要な村・集落である）とは、神埼七山（三瀬・藤原・扛・久保山・腹巻・鹿路・広滝の各山）、佐賀七山（関屋・菖蒲・畑瀬・小副川・松瀬・名尾・梅野の各山へ佐賀七山を総称して安富山とも云う）と『神代家伝記』には記述がある。小城一二ヶ山（合瀬・藤瀬・古場・無津呂・大野・麻那古・波多瀬・古湯・大串・栗並・杉山・市川の各山）を指している。

神代新次郎（後の勝利）の異母兄に周防守利元という人物がいた。利元は弟の智勇が非凡であることをみて、家を興すのは新次郎のほかにないとして、弟に神代家の相続を譲った。利元はその後神代姓も辞して、生母の父



勝玉社(三瀬村、宿)と三瀬城山(写真の最奥)

勝利はその後、小副川の谷田に要害の地を選び第二の城(谷田城)を築き、かねてここに在城することにした。当初は勝利に服従しない者もいたようである。例えば無津呂の嘉村氏一族の中には、勝利に討伐された者も出ている。(264頁参照)。だが次第に譜代の恩顧を受けたもののように、山内の諸将ごとく臣従し、勝利の徳を慕うようになった。後に勝利は山内の住人から神代大和守武辺朝臣勝利公と仰がれた。

神代氏は鍋島氏を除き、近世に大身のままに戦国の名字を伝えた佐賀では唯一の家である。それはどういう理由で成功したのかと考えると、まず勝利は、父が初めて佐賀に流れ着いた門地のない武将であるから、自己の基礎となる領地が必要であったが、彼はこれを旧主ある所に求めなかった。主を追討すれば、その報復に悩まねばならない。だから初めか

を考えるようになった。三瀬山城主の三瀬土佐守入道宗利もその一人であった。

三瀬宗利の祖は文永元年(一二六四)東国から西下して北肥山内に入り、三瀬山の領主となった野田周防守大江清秀である。宗利の父はその四代の子孫で野田長門守房家入道浄安と号し、浄安の時姓を三瀬氏に改めた。

享禄年間のころ(一五二八―一五三一)、新次郎は神崎・佐賀・小城の山内で五〇〇人の門弟をかかえるまでの剣術の指南として、その名をとどろかせるまでになった。

ある日、三瀬宗利の一門親類が集まって酒宴を開いている時、神代新次郎という武者がこの近くで剣術の指南をしていて、尋常ならぬ豪勇らしいという話が出た。これを聞いた宗利は一門の師範として迎えようと考え、甥の三瀬九郎左衛門(宗利の弟和泉守入道宗円の子)を招いて、その真偽を見届けてくるように指示した。早速九郎左衛門は新次郎の宿所、鬼ヶ鼻南麓の井手野村吉野山麓の寺谷にある梅溪庵(現三瀬村中鶴の梅谷山円光寺の旧寺)へ行き、面会を求めた。その非凡さに驚いた九郎左衛門は、その旨を報告した。宗利も新次郎に師範として三瀬山にきてもらうように懇願した。新次郎も承諾した。滞留する新次郎に接した宗利は、新次郎の非凡さを益々評価することとなり、新次郎を山内の総大将に擁立して、山内の大同団結を考えた。

そこで、宗利はまず松瀬城主の松瀬能登守又三郎宗茂へ相談したところ、宗茂も同意した。早速山内の諸城主にもこの趣旨を伝え、三瀬山の館に召集させた。

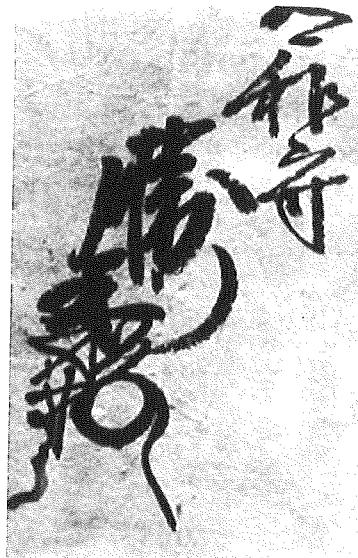
参集した諸山の領主は、松瀬山城主松瀬能登守又三郎宗茂、扛山城主扛紀伊守種満、藤原山城主藤原但馬守、畑瀬山城主畑瀬兵部少輔盛政、葛蒲山城主葛蒲遠江守、栗並山城主栗並伊賀守、梅野山城主梅野源太左衛門、広滝山城主広滝新三郎、合瀬山城主合瀬因幡守、名尾山城主名尾左馬允、小副川山城主小副川因幡守を中心とした

諸将であった。

評議は即日一決し、連判を押して主従の契約を堅めた。時に天文元年(一五三二)であった。新次郎は二二歳である。新次郎は名を神代刑部少輔勝利と改め、三瀬宗利を奉行兼後見役と定めた。三瀬城は極めて要害の地にあるので、ここを総帥神代氏の居城とした。

勝利はその後、小副川の谷田に要害の地を選び第二の城(谷田城)を築き、かねてここに在城することにした。当初は勝利に服従しない者もいたようである。例えば無津呂の嘉村氏一族の中には、勝利に討伐された者も出ている。(264頁参照)。だが次第に譜代の恩顧を受けたもののように、山内の諸将ごとく臣従し、勝利の徳を慕うようになった。後に勝利は山内の住人から神代大和守武辺朝臣勝利公と仰がれた。

神代氏は鍋島氏を除き、近世に大身のままに戦国の名字を伝えた佐賀では唯一の家である。それはどういう理由で成功したのかと考えると、まず勝利は、父が初めて佐賀に流れ着いた門地のない武将であるから、自己の基礎となる領地が必要であったが、彼はこれを旧主ある所に求めなかった。主を追討すれば、その報復に悩まねばならない。だから初めか



神代大和守勝利の花押

時あたかも同じく少武冬尚の勢力は弱体化し、僅かに龍造寺一族の支援で命脈を保っているにすぎなかった。龍造寺氏も勢力を拡大していくために鎌倉期以来の名家少武氏を利用した。しかし、享祿三年（一五三〇）の田手畷合戦で大内勢を撃破した後は、勢力拡大路線を突き進んだ。そして徐々に少武氏を乗り越えて肥前の覇者へ

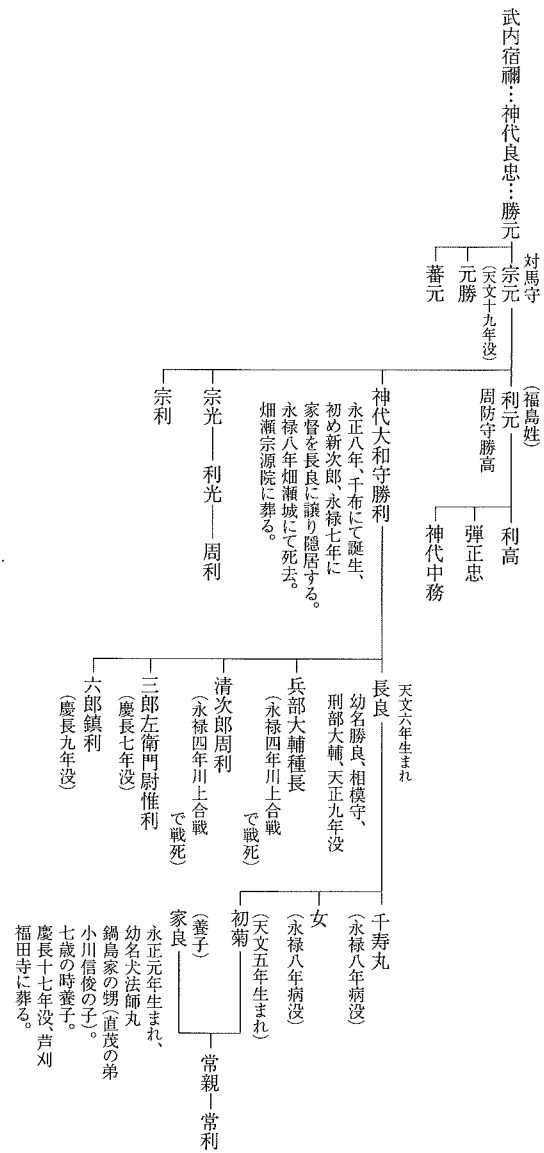
いった。

神代勝利を棟梁として大同団結した山内勢は、勝利の智勇才覚で強力な存在となっていた。それは次第に外部勢力との摩擦を大きくさせるだけでなく、自領の防衛のみならず外部への侵攻拡張を目指すことにつながって

長良と改めた。

天文四年（一五三五）二五歳の勝利は、川久保村の豪士副島近江守信告の娘菊と結婚した。同六年（一五三七）嫡子長良が誕生した。神代備後守蕃元（父宗元の弟甚五左衛門）を長良の後見と定め、厳格に育てられた。当初は太郎次郎勝良と号し、下合瀬の万福寺住職虎山和尚のもとで学問を修養した。その後、神代刑部大輔武辺朝臣と改めた。

（三）神代・龍造寺両氏の抗争



ら主なき所を求めたのである。つまり、個々に離散していた脊振山地の武将たちを、剣術技量が抜群のために招かれたのを機会に結束させ、彼らの利益を守る立場で自ら棟梁となったのである。であるから山内の結びつきは強く、それは近世まで神代氏を慕う強い伝統となって地元に残った。



武運長久祈願の経塚（古場）

の野望をいなくようになっていった。だから少貳氏を盟主として安定化を計ろうとする勢力と、少貳氏を踏み越えて戦国大名として雄飛しようとする龍造寺勢とは当然激しい衝突する運命にあった。少貳氏を盟主にして結束しようとした勢力の中心のひとつに神代氏がいる。その神代氏と龍造寺氏との本格的な抗争は、天文十年代から始まる。

天文十四年（一五四五）少貳氏一族で多布施城主馬場頼周は、神代勝利や高木・八戸氏らと共に龍造寺剛忠を攻めた。剛忠は一時筑後へ逃亡した。この時剛忠は一族の者を多数謀殺された。（259頁参照）。

同年十二月には、神代勝利は与止日女社に灯油免等を、同十七年十二月には田地を寄進している。同二十二年十二月には佐賀郡高木の内坪の上（現佐賀市高木瀬町長瀬）三町八段の土地を寄進しているので、当時はこの地域も神代氏の所領となっていたのである。

村中龍造寺家の胤栄の臣土橋栄益の叛謀で天文二十年（一五五一）以来筑後に流浪していた隆信は、同二十一年の帰国は暴風雨のため失敗した。だが翌年には鍋島直茂らの支援で佐賀に帰還した。鍋島氏という有能な家臣を得た龍造寺氏は、鉄壁の態勢を作り出しつつあった。

佐賀を奪還した隆信は間者を多数配置して、神代・小田・江上の各氏を攪乱させた。反隆信勢は互いに疑心暗鬼に陥り、まとまりを欠き佐賀城の奪還はできなかった。この隆信の作戦について『神代家伝記』は、

此時神代方へハ隆信ト小田・江上ト内通有テ神代ヲ倒サントスベキ術也ト拵へ、又小田・江上へハ神代ト隆信ト内通有テ小田・

江上ヲ計ラルベキ術アリト、出家商父ノ雜説交々有シ故、互ニ心ヲ置キ合テ隆信帰城ノ時此三家出勢ナク、隆信輒ク城ニ入シト也。若シ神代・江上・小田・八戸・高木一致シテ戦ハバ、今度ノ帰城叶フ間敷ヲ、隆信ヲ了簡セラレ、間者ヲ以テ斯ク所々ニ雜説ヲ云ハセラレシ也。是レ能キ謀ナリ。勝利公モ後ニ稱美シ玉ヒケル。

とあり、隆信の権謀術数に勝利も舌を巻いたことを伝えている。また文中の「出家・商父（夫）ノ雜説交々有シ」とあるのをみれば、当時は山内も商人や僧侶の出入も多く、商業もある程度盛んになって商品の流通もすすみ、民衆への仏教も浸透していたことを物語っている。

水ヶ江城に帰還した隆信は、八戸・小田氏を攻略し、勢福寺城の江上武種を攻撃した。隆信と和睦した江上武種が仲介して、勝利は隆信と和睦し和平が成立した。

天文二十三年（一五五四）勝利の嫡男長良は、川副村の鹿江遠江守の娘桂姫と結婚した。

弘治元年（一五五五）二月、隆信は勝利を多布施館に招待したが、饗膳の毒事件の噂が出て両氏の間には再び亀裂が生じた。そこで、勝利は神代備後守蕃元を遣し、大友義鎮に好を通じた。

『神代家伝記』によると、勝利は小副川城の小副川教実としめし合わせて、教実を追放したと見せかけ佐賀へ送った。隆信は気付かずに山内への案内者として優遇した。教実は隆信の計画・行動を逐一勝利に内通したので、勝利は隆信の術中に陥らずに済んだという。

同年九月、隆信は自ら出馬して川上から山内に向い、谷田城を奇襲した。勝利は龍造寺軍の攻撃を一時避けるため、谷田城を脱出して三瀬城を経て、筑前の怡土郡（現福岡県糸島郡）の高祖城主原田入道了栄を頼り、同郡長野に退いた。隆信は山内を抑えたので、諸所に代官を配置して佐賀へ戻った。この時伯耆坊・越後坊・姫来坊

の三人の山伏は勝利の武運長久を祈願し、山内各所に経塚を築き石碑を建てた。経塚は現存している。

しかし、勝利はこの年の大晦日の夜に山内に戻り、翌弘治三年（一五五七）正月元旦熊の川代官所を急襲し奪還した。だが前夜来の大雪と山越えのため、勝利をはじめ人馬ともに凍え、疲れ果てていた。この一戦を伝え聞いた川上淀姫神社の社頭小野式部は近隣の者たちの協力を得て、粥を煮立て桶・樽その他ありあわせの器に入れて運びこみ、領主の帰還を祝った。

この時、元旦の歳の餅も間に合わなかったもので、大釜に小豆ごと煮こんで搗きたて、早掬えの餅を用いて歳の餅とした。こうして作った餅のことを山内では、「なべほぐり餅」または「隣知らず」、あるいは「だどし」などと呼んだ。これ以後、神代家では粥となべほぐり餅を正月の歳とり用いることを恒例とした。また山内の領民も近世に到るまで吉例としてこれに倣ったという。

先に龍造寺氏に降伏した八戸宗暘は、神代勝利や大友氏に通じ、龍造寺氏に叛したとの風説が立った。八戸氏は佐賀郡甘南備峰の城主高木宗家の弟益田家綱の子宗益が佐賀郡於保村（現大和町）に居住し、於保氏を称していた。同氏は代々国府執行職（国府在庁官）を勤めた。一〇代後の胤宗は龍造寺家兼（剛忠）の女婿で、その子宗益が八戸氏を称した。その子の宗暘は隆信の妹を娶って、八戸をはじめ新庄、於保・益田・木角・蛭久・成道寺など中佐賀地方の西部域を領有していた。

隆信は宗暘がその子飛車松を人質とすることを決めていたので、鍋島信昌（直茂）に飛車松を連れにやったところが不在であったため、約束に反したといつて憤慨した。

そこで弘治三年（一五五七）正月、隆信は弟の信周、一族の家就、納富信景らに八戸城攻撃を命じた。正月の

ことで不意を突かれた八戸城内は混乱した。神代勝利は杠主水を遣わして八戸城を助けた。龍造寺軍は城の近くに火を付け、城壁を破って攻め込んだので、城主宗暘は城を出て神代勝利を頼って山内に走った。

宗暘から援軍を頼まれた神代勝利は、尼寺の西の駄市川原（現大和町）に出陣したので、隆信はその南の長瀬（現佐賀市高木瀬長瀬）に陣した。隆信の臣小川信安・納富左馬之助等が攻めてきたので、神代方もこれに応戦し、勝利と八戸宗暘は春日山と丸山砦の間に籠った。龍造寺軍は春日山に移陣し、山腹の名利高城寺を焼き払った。神代勢は夜陰に乗じて山内に退いたので、龍造寺方もまた陣をひいた。

八戸宗暘は勝利の援けで杠山（現三瀬村）に館を設けて、そこに居住した。その後、今山合戦に従軍したが敗れ、主従僅か五・六騎になって山内を目指して落ちのびるところを、鍋島直茂の家中川原忠左衛門に切りつけられ、痛手をうけたが、辛くも杠山までたどりついた。だがその時の傷がもとで死去した。杠山の伽葉山清流寺の大供和尚の引導によって、杠山の宗の辻（宗峠）に葬った。法名は心翁宗安と号した。

神代勝利は本城を佐賀から七里（二八キロメートル）の三瀬城とし、一四ヶ所に要害を構えていた。隆信はこれに対抗するため乗取った春日山城（甘南備城）の城普請にかかった。城は弘治三年（一五五七）九月に完成したので、城番として小河筑後守信安・同弟左近大輔を命じ、これに鋭兵を差しそえて山内の押えにした。勝利は城原の江上武種と議して陣を構え、九月下旬にその付近の地形に詳しい梅野帯刀・松瀬又三郎等に春日山城を攻めさせた。そのため小河左近大輔以下大半の城兵が討死した。合戦後神代勝利は城の西方の平らな場所に幕を張って、兵糧を配って士卒の労を休めた。それ以来この場所を「布張平」と呼ぶようになった。またこの戦場の跡に「駒隠れ岩」「足型の岩」と呼ばれる岩石が残っている。この石は合戦の時、春日山城の若武者が馬とともに大石のかげ



寄合平の交差点

隆信は三反田の南広坂（現大和町大字松瀬）の龍瀬付近に陣を敷いたが、先陣が敗れたことを知ると反撃を加えようとした。しかし、ここで山内に攻め込むと敵の術に陥るので、後日を期すようにと家臣に諫められ、軍を返し帰城した。激戦地となった金鋪（敷）峠の古戦場跡の「駒隠の岩」には次の墓石が残っている。

種子島系の鉄砲であろう。
隆信は三反田の南広坂（現大和町大字松瀬）の龍瀬付近に陣を敷いたが、先陣が敗れたことを知ると反撃を加えようとした。しかし、ここで山内に攻め込むと敵の術に陥るので、後日を期すようにと家臣に諫められ、軍を返し帰城した。激戦地となった金鋪（敷）峠の古戦場跡の「駒隠の岩」には次の墓石が残っている。

一方、神代勝利は佐賀に遣している間者からの急報でいち早くこの事を知り、関屋・高野岳に据えて置いた緊急合図用の大鐘をついて、山内の軍勢を召集した。この大鐘は勝利が筑前長野から帰還後、味方に急を告げるときのために設置した。この鐘が聞こえない山々には、次ぎにホラ貝や太鼓など鳴り物の合図を定め、夜は同時に松明を焚いて、山内全体に急報する手配ができていた。

上小副川の寄合平には総勢三〇〇〇余騎が緊急集合した。勝利は軍勢を二手に分け、一手は嫡子長良を将とする一三〇〇余騎で名尾筋に向かわせ、もう一手は自身が一七〇〇余騎を率いて三反田に通じる道を指して進み、大野原より熊野嶺に陣を敷いた。勝利は自ら敵の陣立を見ようと川浪駿河守（一説に梅野兵部）に鍵（や）を持たせて

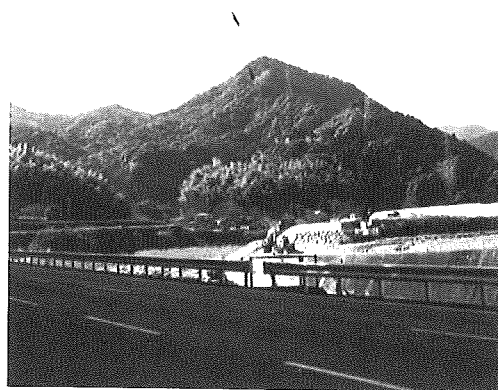
春日山城を攻め落とされた上に、弟左近大輔まで討ち取られた小河筑後守信安は、主君隆信に対して神代討伐をしきりに勧め、十月十五日手兵を率いて出馬したので、隆信もまたこれに続いて出陣した。信安を先陣にして山内に兵を進め、夕方に金鋪峠に到着した。この峠は金鋪山の東に位置し、春日から北の名尾に通じる山路にあり、現在は名尾峠と称している。信安は更に山内に進撃しようとしたが、既に日没になり危険を避けるため春日山城に宿陣することにした。

の歌がみえる。

春日山城を攻め落とされた上に、弟左近大輔まで討ち取られた小河筑後守信安は、主君隆信に対して神代討伐をしきりに勧め、十月十五日手兵を率いて出馬したので、隆信もまたこれに続いて出陣した。信安を先陣にして山内に兵を進め、夕方に金鋪峠に到着した。この峠は金鋪山の東に位置し、春日から北の名尾に通じる山路にあり、現在は名尾峠と称している。信安は更に山内に進撃しようとしたが、既に日没になり危険を避けるため春日山城に宿陣することにした。

に隠れていたが、神代勢の馬の嘶（いな）きに誘われて、若武者の馬も啼いたために発見されてしまい、とり囲まれて討ち取られたというので、この名がつけられたという。『西肥古蹟詠』には、

むら雲の消えし嵐の趾（あし）とえば
苔むす石に名をのこしけり



難攻不落の要害地にある熊の川城（上熊の川）

勝利が金鋪峠の合戦で大勝利を得て、山付きの村々を残らず掌領してから、その威勢は日を追って盛んとなった。その頃、筑前国荒平（現福岡市早良区）の城主小田辺紹連（宗連）の領内の者が、徒党を組んで山を越えて神代領内に侵入し、強盗狼藉を働くとの通報が藤原山の代官からあった。筑前への進出の機会を待っていた勝利は時節到来と悦び、小田辺紹連追討の作戦を開始した。

急報を聞いて馳せ参じた三瀬・藤原・一番ヶ瀬・腹巻の一族をはじめ、山伏の大弓坊・円乗坊らの荒僧を先鋒として一〇〇〇余騎で、鬼ヶ鼻と脊振山の中間にある椎場峠より早良・池田口に出陣した。勝利は福島伊賀守・神代源内のほか江原・中野・秀島以下の剛兵を選り抜き、敢えて少数の一〇〇余騎を率い、三瀬峠から曲淵・石釜を通り、その下方の大野に密かに本陣をおいた。

『神代家伝記』によると、勝利は高木・副島・本告・八戸・木塚・杉町の諸将が配下となったので、村々を巡見し神野草場（現佐賀市駅南中央）の北側の横道に、「従是北亘東西神代領地也」と書いた境界を示す大札を立てさせて山内に帰った。なお、平野部攻略の気配をみせ、山内の咽喉部に当る熊の川の西北の山上に熊の川城を築いた。草場佩川（江戸幕末期の佐賀藩の儒学者）の詩に「巖に到りて樵逕絶え、水を背にして戦場多し」とあるように、要害堅固の城であった。

〈表面〉

同武藏守信俊
小川筑後守信安神儀
同市衛門尉家俊

〈向かって右の開戸〉

三靈神龍造寺鍋島之二氏任無二勲功顯然終三代共於戰場遂忠死畢至死忘後武門閔光輝故神靈國家令守護事無疑依而先祖戰死場於金敷嶺仰小岳明神國家并小川氏守護神奉崇者也
天明六丙午年季春吉祥日敬日

〈向かって左の開戸〉

小岳明神

〈向かって右側面〉

天明三癸卯三月二十一日建立

小川判助俊顯

〈東後ろ墓石〉

右側面
弘治三丁巳年十月十六日戦死

前面
江副新八郎信英之魂

左側面
建立 江副松之新保忠・江副伊織榮紹

〈後方の山面石の墓石〉

小川筑後守
水町右馬助
中元寺新左衛門

〈裏面〉

天正十二年甲申三月二十四日
弘治三年丁巳十月十六日
文祿二年癸巳六月十二日

小川勢戦死者供養塔（鉄鋪山）



菖蒲遠江守館跡（菖蒲）

建立して氏神として祀るとともに、当時七山の宗廟として崇敬されていた野波神社を宗社と定め、神領として田地五町歩を寄進した。そして野波の里の地名を杠山と改めた。その後杠氏は少貳氏や千葉氏との結びつきを深めていく。三瀬村杠の大日橋の西南のダムサイド付近に、南北六六、東西一五の大曲輪を中心とした館跡及び、その後方を取り巻くように山岳防陣が設けられている。

松瀬氏の出自は不詳である。同氏は大和町大字松瀬の松梅小学校敷地一帯に館を構え、その北方の二〇〇以上の山に砦を築き、館北方の谷間を取り巻くように山岳防陣がみられる。

菖蒲氏の出自も不詳である。菖蒲遠江守は神代勝利の重臣となり、上菖蒲にその

小田辺紹連は軍兵三〇〇余騎を集め、池田口の將兵を本陣とみて紹連自ら先頭に立つて押寄せた。両軍入り乱れての合戦の頃合いをみて、本陣の勝利は小田辺勢の後方横合いから、関の声をあげて攻めた。小田辺勢は惨々に敗れた。紹連は誓紙を出して和睦を乞い、本領安堵を願ったので勝利はこれを許した。この勢いに恐れをなした原田・曲淵・大津留の諸氏も和睦を申し出たので、勝利は和を結んで熊の川城に引き揚げた。

龍造寺隆信は先に帰順した神埼の江上武種が少貳冬尚を守護し、東肥前の少貳氏旧故の諸將や神代勝利と謀り、隆信を攻める計画があると耳にした。そこで永祿元年（一五五八）連池の小田政光や犬塚三氏に攻撃の命令を降した。勝利は江上武種の通報によって出援し、江上氏の勢福寺城に到着した。勝利は城原川西岸の長者林（現神埼町本告牟田）で、小田・本告勢を攻撃し、小田政光は敗死した。一方反撃に出た隆信は勢福寺城を包囲した。包囲中の十二月三日、実相院座主増純法印の計らいで、龍造寺・千葉・江上・神代の四氏の和平が整った。隆信は包囲を解き、佐賀へ帰陣した。

しかし隆信は翌年の正月、和平を結んだばかりの江上武種の勢福寺城を取り囲んだ。不意を突かれた武種は脱出し、筑後に逃れた。同城に匿われていた少貳冬尚は自害したという（冬尚の死には異説もある）。冬尚の死によって鎌倉時代以来の名家少貳氏も事実上滅んだ。

（四）神代衆の居館と山内の城郭

神代勝利の活躍を支えたのは神代衆と呼ばれる家臣団の強い結束力があつた。三瀬・杠・松瀬の三氏を神代衆

三人衆という。これに菖蒲・畑瀬氏を加えると五人衆。さらに藤原・栗並氏を加えると七人衆という。

三瀬氏の祖は野田氏である。文永元年（一二六四）、東國の士野田周防守大江清秀が一族を率いて、北部山内に入った。清秀は入山とともに玉林寺（現大和町久池井）の末寺である長谷山観音禪寺を再興し、宗廟と定めた。また筑前香椎宮の分霊をいただき、杉神社も造営したという。清秀の孫房儀は山中より三瀬城へ移り住んだ。房儀の孫長門守房家は入道して浄安と号し、応永十六年（一四〇九）に姓を三瀬氏に改めた。浄安の子三瀬土佐守貞家入道宗利は、神代新次郎（勝利）を山内の総大将に迎えて、その後見役を勤めた。

杠氏は嘉吉二年（一四四二）、阿波国の武士杠日向守が、淡路国の弓絃葉権現を奉供して山内の野波の里に來着したという。だが『神代家伝記』には日向守は淡路国の住人と記している。日向守は入山と同時に乙宮権現を

館跡が残っている。

畑瀬氏の出自も不明であるが、一四世紀前半の史料で確認される安富荘畑瀬村の土豪の後裔ではないかと考えられる。畑瀬越前守は勝利の重臣となり、東畑瀬に館跡が残る。

藤原氏は平安末期に藤原村に入山した藤原鎌足の末孫と伝えられる藤原内匠^{たくみ}を祖とする。三瀬村の土師^{はじ}の『八龍神社社伝』には、建久二年（一一九二）藤原内匠が上京する際、海難に遭ったので八龍宮に神明の加護を祈ったところ、無事に岸につくことができたので、帰郷後八龍社の社殿を造営寄進した。戦国期には藤原但馬守師房^{しろうふぎ}という武将がいる。

栗並氏の出自は不詳。戦国末には栗並伊賀守が神代氏の重臣として活躍している。栗並伊賀守の石塔は、栗並の三光寺の寺内にある。

さらに山内の政治に就いての確実な史料で最も古いものは、『北肥戦誌』に引用された「前略次少武並対馬者共一昨日五日戌刻船乗没落候。（中略）於其方自然御用候者御奔走肝要候。（下略）」とする文書で、嘉吉二年（二四四二）大内氏が大宰府宝満岳に少武氏を撃破敗走させた時に、大内氏の家人から「神埼七人衆」に宛てたものであると言われているが、この頃彼等山内勢の間には既に団結が始まっており、また山内勢が大内氏に気脈を通じていたことが知られる。「神埼七人衆」とは『神代家伝記』によると三瀬・藤原・杠・久保山・腹巻・鹿路・広滝の諸氏をさしている。

小城町大字岩蔵^{いわくら}にある雲海山岩蔵寺（天台宗の古刹）には、宋版大般若経や如法経過去帳、木造阿弥陀如来立像など貴重な文化財が所蔵されていた。しかし、残念ながら昭和五十九年（一九八四）五月二十八日の火災で灰

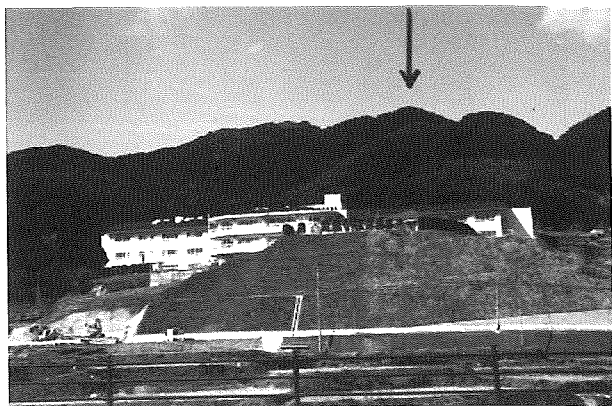
燼に帰した。この過去帳に記載されている人名に、富士町域の人物と考えられる者がある。「一河孫三郎」の「一河」は市川と考えられる。「道秀逆修^{杉山}」や「妙光^{藤瀬}」は杉山・藤瀬を拠点とする人物である。この過去帳は建久年間（一一九〇～九九）から文明年間（二四六九～八七）にかけての人物を記載しているので、この時期に前述した三人の人物が活動したことは史実である。

その他の有力な家臣を地域別にあげると、富士町内域には古湯信濃守（古湯）、藤瀬左馬之助（藤瀬）、小副川左衛門大夫（下小副川）、関屋源八郎（下関屋）、合瀬因幡守（下合瀬）、賀村讃岐守（上無津呂）らがいた。しかし白山神社を氏神とする関屋氏は室町中期にはその勢力も衰退しているようである。三瀬村内域には栗原佐渡守、広瀬三河守、芹田周防守、薙野式部少輔がいる。脊振村内域には一番ヶ瀬左近丞、服巻伯耆守、西川伊予守、広滝新三郎、松永助左衛門らが居住していた。さらに大和町内域には梅野源太左衛門、川浪駿河守、名尾左馬之丞らが在居していた。

これらの家臣は「城」とも通称される館を設け、館を中心に周囲の山稜を含む防御的施設を築いていた。

では次に神代勝利に関する代表的な城（館）をいくつか紹介する。

まず三瀬城。この城は元来三瀬氏（旧姓野田氏）の居城である。勝利が山内の総大将に迎えられると、この城を山内統治の拠点とした。三瀬山（城山）は標高五六〇メートルである。山頂部は東西約六〇メートル、南北約五〇余メートルの広さがあり、西方一段下った所に長さ五〇メートル、幅一五メートルの長方形の削平地がある。上方の広場の中央には、神代勝利を祀る「勝玉大明神」の石祠が建てられている。



谷田城跡遠望（大字小副川、谷田）

次に勝利の直轄城として谷田城がある。山内の総大将に迎えられた勝利の目標は当然龍造寺氏の打倒である。だから平野部の龍造寺氏との接点近くには堅固な新城建設が急がれた。三瀬城の構えを強固するとともに、程なく南部地区の拠点として谷田城の新築にとりかかった。谷田城は熊の川温泉郷の東北に聳える城山（標高三〇〇メートル）の山頂に設けられた。小副川川をはさんで西側の小副川城及び東南の梅野城との三城が相対して、山内への関門の役目を果たしている。また、北に重畳たる山岳を控え、南は東西に貫流する嘉瀬川の溪谷を第一防御陣とする要衝である。つまり、谷田城は神代勢南端の最大の前衛基地であった。同城の遺構は山麓の谷田集落から、裏山の中腹山頂にかけて残存している。居館跡は同集落の南端の舌状丘陵の突端に「館」の地名を留めて

していた。ここから南側に三瀬・松瀬・虹・菖蒲・畑瀬・藤原・栗並の諸將をはじめ、諸士が屋敷を構えた。また、東の谷に御座所を設け、本丸からここまで九九折の細道をつけていたという。この谷を河内谷または古弓谷といい、御座所を御館と称した。長良はこの御館で死去したといわれ、墓は南麓の長谷山観音禅寺跡にある。御館の南北には譜代の臣が屋敷を置いた。これらの館一帯は、北に重畳たる山嶽が連なり足場が悪く、西は峠を越えて大川があり、正に自然の要害に守られた城砦であった。

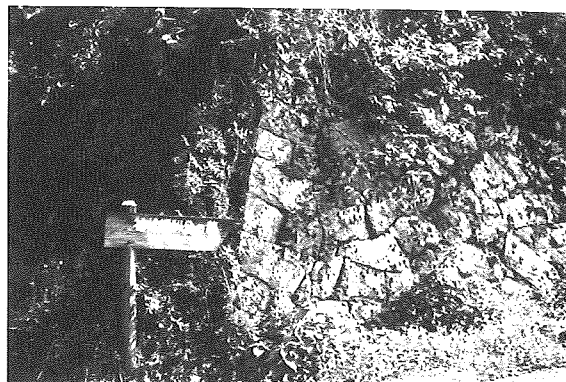
次に二の丸は東西に伸びた長方形の狭域であるが、門の造りは墨内に武者溜、左肩方を突き出した本丸と同形の横矢構えの虎口となっている。全体として同城の縄張りには周囲に堅堀を多く設け、かつ周囲は自然の断崖で、まさに天恵の要害である。

城の館は南麓一帯に見られる。神代長良は大手通りの中間に館を建てて左別当と名付け、いつもはここに常住



『九州治乱記（北肥戦誌）』（鍋島文庫）

記録によると勝利の子長良の時、大修復を行い、上段を本丸、一段低い所を二の丸と定めた。本丸は西辺では高さ二・五メートル、東辺部は一・三メートルの石垣造りの土壁で、全周に幅一メートル程の馬路が設けられ、西辺部の中央と南辺の中央の二ヶ所に門（虎口）がある。このうち西門は嚴重で、門の南辺は城壘（土壘）が極度に突出し、その上辺は三メートル掛ける四メートルの広さの櫓台をもっている。墨内は二〇メートル掛ける二〇メートルの広い勢溜（武者溜）となっており、全体としては侵入者を横合いから攻撃する横矢構えの虎口である。更に左辺の城壘上にも五メートル掛ける四メートル程の空地が設けられ、展望と防御の壘となっており、この虎口をもつて櫓門としたようである。一方、南辺壘、中央の虎口は中期以降、大手の役目を果たしたようで、ここから南方の俗に九九曲りの軍道を下れば広大な城の館に達する。



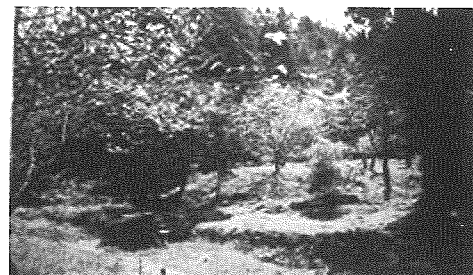
八咫瀨城近くの屋敷地に残る石垣（東八咫瀨）

神代家臣団の砦と館は、別個のものとして存在している。大体館の周囲（あるいは三方）の山稜（尾根）上に、小曲輪（烽を備えたものあり）、土

さらには佐賀平野の北部に千布城がある。土生島砦とも称される。同城は現佐賀市金立町大字千布友貞の土生島にあって、自然のクレークを城濠としていた。遺構は大半消滅しているが、城濠は最近まで昔の面影を留めていた。また、伝承「城」をはじめ、白（城）島、家老屋敷、職人町、舟隠しなどの地名が残っており、明治二十一年（一八八八）作製の地籍図を見ると、概ね五町歩域の縄張りであったと想定される。

次は八咫瀨城。同城は東八咫瀨の、八咫瀨山の北西麓宗源院の近くに「館」の名を留めている。永禄四年（一五六二）の川上合戦での敗戦の翌年、神代長良の娘を隆信の三男鶴仁王丸に縁組みさせて、勝利と隆信の間に和議が成立した。そこで、勝利は嫡子長良に家督を譲り、同城（館）を建てて隠居した。しかし、その翌年にこの城で病没した。城の遺構は宗源院の北東約一〇〇メートルの地点から山麓部一帯にお館、風呂谷などの地名を留めているが、僅かな石垣や門址を残すのみである。なお砦は八咫瀨山の山頂にある。

意図的築城によるものと考えられる。

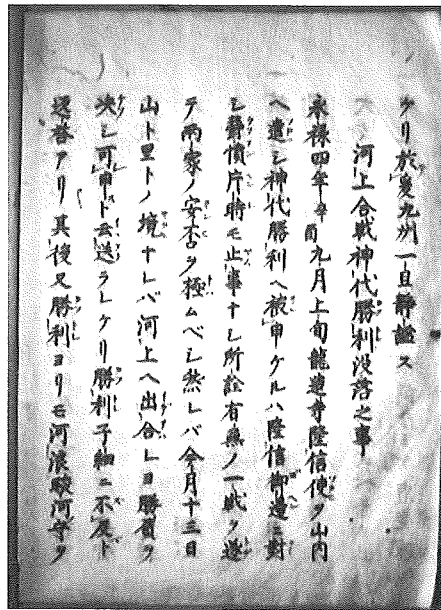


八咫瀨城跡（東八咫瀨）

いる。現在は再開発されて平端になっているが、南辺には虎口（大手門）跡が残っている。同館の南東部は急峻な溪谷で、『九州治乱記』には「無双の要害」と記している。その背後の山腹には小さな曲輪群（山岳防御陣）が延々と山頂へ続くが、中程にある尾根上の曲輪は東西約三〇メートル、南北約一〇メートルで、二の丸に比定される。さらに、東の山頂に向かって進むと二つの大曲輪があり、最頂上には数条の堅堀を配した腰曲輪を伴う南北二〇メートル、東西八メートルの大曲輪があり、本丸に想定される。

次に、熊の川城を見てみよう。熊の川城は俗に城山と呼ばれ、熊の川温泉の西方の標高三四六メートルの山頂にあり、山内への関門にあたる要衝に位置している。築城年代は明らかではないが、神代勝利が南関門の一つとして築いた。永禄四年（一五六二）の龍造寺隆信との川上合戦では、勝利が本陣としていた。

遺構は山上の最高所に三二メートルと一〇メートルの広さの削平地を本丸、それより西に約三二メートル下った二二メートルと一一メートルの郭が二の丸、さらに西に二二メートル下った二〇メートルと一九メートルの郭が三の丸となっている。一方東側は九メートルと八メートル、一〇メートルと一〇メートル、九メートルと九メートルの階段状の三つの曲輪を設けて出丸とし、その北辺はいずれも一メートル余の土塁を築いて防御している。これらの郭の北側は自然の断崖で防壁とし、南辺は大体緩傾斜であるために総数八本からなる大堅堀で防御している。郭の表虎口はいずれも西向きで、土塁伸ばしによって直結している点が本城の特色である。ことに本丸、二の丸、三の丸など主・副郭の広大なこと及び数条の堅堀をもつことも本城のもう一つの特長で、戦国時代における山城構造の発展を示す典型である。いわゆる「一二三の城」という理想的な縄張りは、神代勝利の



『九州治乱記』(鍋島文庫)

テハ山ト里ト境ナレハ川上ノ辺ニ出向ヒ見参ニ入候ベシ」(伝記)と快諾し、合戦の期日を九月十三日と定めて使者を帰した。神代勝利と龍造寺隆信との雌雄を決する最大の決戦は、こうして準備されていくことになった。勝利にとって同じ時代に、しかも同じ肥前に拠点をおく隆信とは宿命のライバルであり、野望に燃える勝利には越えねばならない高い壁であった。これに果敢に挑戦したのである。

約束の期日が迫ると、勝利は山内の諸勢を熊の川城

壘・空堀などを連結した防衛ライン程度の施設である。なかには主郭的曲輪を持った、いわゆる単郭式山城に近いものもあるが、多くの場合、山上の構え(城・砦)そのものを攻防の基幹とするのではなく、谷合い、あるいは山麓の館を守るための防衛施設の傾向の強いものである。

神代家臣団(神代衆を主力、二六ヶ山を集結)の共通点として、第一は各郷土とも大明神を祭祀していること、第二は領域にシンボル(象徴)の山を有している。第一については、本城三瀬城跡に「勝玉大明神碑」が祀られているように、神代氏自身軍神武内宿禰(白髭)大明神を守護神としているが、二六ヶ山の郷土中、大半の館に大明神が祭祀されているようである。一部には広瀬大明神、腹巻大明神、菖蒲大明神、白髭大明神(畑瀬氏)が祀られている。しかしこれらの祭神は明治初年に脊振神社に合祀されて、今は消滅したところもある。第二の領域内の高山を象徴したことについては、山内二六ヶ山と称することからも理解できるし、また、山頂に烽火跡を残している所が多いことから、本城(三瀬城)を中心とする通信網の役目も持っていた。例えば、栗並から畑瀬城への連絡のため鷹の羽集落南西のサンジヨウ(山城)に烽火をおいた。また、戦時・緊急時には鐘・太鼓によって郷土間の連絡に利用するなど、山内の防衛上極めて重要な意味を持っていたのである。

なお、この項は本原武雄著『風雲肥前戦国武将史―戦国武将伝と山城散歩―』(佐賀新聞社刊)を参照・引用させていただいた。

(五) 勝利と隆信の川上合戦

勝利は筑前の小田辺氏を降伏させ、原田・曲淵・大津留の諸將との和睦が成立したので、龍造寺隆信を倒して肥前を掌中にするための作戦を練っていた。龍造寺方では神代勝利の企ての風聞に、堂々と決戦を挑もうと永禄四年(一五六二)九月の初め、山内に使者を遣わしてきた。「運ヲ天ニ任セ真実鎗ヲ合セ家ノ安否ヲ定ムベシ」(神代家伝記)以下伝記)と隆信の堅い意志を伝えてきた。勝利も使者にむかって「我兼テ望ム處也。其儀ニ於

に集めた。新参古参の士都合七〇〇余騎であった。勝利・長良父子は老臣達と軍議を開いた。龍造寺勢は山内の難所を避け、平坦部に引出して戦う作戦という。平坦部で大軍の敵と合戦しては必ず勝つとはいきれない。かつての金鋪峠の合戦のように隆信勢を山内の難所に誘き入れ、地の利を生かして攻めれば、隆信を生け捕りして勝つことができよう。もし不運にして仕損じたら、山内の難所に拠ってゲリラ作戦によって敵を追討しようとの作戦が確認された。

大将勝利は、三瀬・栗並・島田・嘉村・白水・福所・小田・垣松・菖蒲・畑瀬・藤原の各氏をはじめ、一二〇〇余騎を率いて、淀姫神社の西惣門（仁王門）に本陣をおいた。

嫡子刑部大輔長良は、福島周防守父子・神代備後守兄弟・江原石見守・中島・梅野・小副川・国分・吉浦・一番ヶ瀬・千布因幡守以下の三〇〇〇余騎がこれに従い、淀姫神社南方の宮原口に陣を張った。

二男兵部大輔種長は、松瀬能登守、杠紀伊守父子一族・合瀬・腹巻・名尾・薙野・芹田・中野・市ノ瀬・馬場四郎左衛門以下一三〇〇余騎の兵を従え、宮の前大門の南に備えを立てた。

三男清次郎周利は、八戸下野守宗暘・西川伊予守・古場・杉山・大野・鹿路その他、近日幕下に属した諸士の集まりを合せて一五〇〇余騎を従えて、川上川の東部（左岸）の都渡城原に陣をおいた。

神代方には阿含坊・東持坊・山実坊などの山伏も加わっていた。阿含坊（前述の金鋪峠の合戦の項参照）は鉄砲の名手であった。この阿含坊が川上合戦で肥前の合戦では初めて、鉄砲を合戦での重要な武器（作戦）として本格的に使用した例だという。

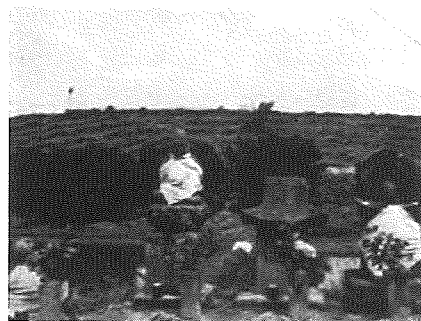
一方、隆信は九月十三日朝八時頃、総勢三万八〇〇〇余騎（軍勢の数では勝利方の五倍強）の大軍を率いて川

上方面に進出して、西山田（現大和町大字川上）に本陣をおいた。隆信の弟龍造寺和泉守長信も本陣に従った。隆信は川上川東岸の都渡城口に弟の信周、一族の鑑兼、部将の小河信友以下を配した。大門口には納富信景以下を配し、自らは大手宮原口に押詰めた。隆信は広橋一遊軒を先陣として、二陣に福地長門守をはじめとして段々に備えを立てて神代長良の陣に迫ってきた。

相手方の陣立の様子を見ていた神代長良は、佐賀勢が一町（約一〇八メートル）ばかりに近づく頃を見計らって兵を起し、弓鉄砲を射かけた。佐賀勢もこれに応戦し、互いに弓鉄砲を放ち合って戦闘を開始した。この時神代軍の中から神代兵衛尉・江原石見守の二人が陣頭に進み出て、一番鎗を振るって龍造寺勢の中に攻め入った。その他の兵も遅れじとこれに続き、関の声をあげて切り込んだので、敵の先陣広橋一遊軒の軍勢は散々に討ち負け、南方に引き退いた。神代勢はこれに力を得て競い立ち、ホラ貝・太鼓を打ち鳴らし、かけ声をかけて攻めかかった。これを見た佐賀勢の第二陣福地長門守入道信重が入れ替って応戦した。しかし神代勢はなおも競い合っていて攻めたたので、二陣も乱れて浮き足だってきたが、佐賀勢は大軍であったので、次々に備えを進めて攻め寄せた。神代勢と佐賀勢とは互いに一歩もひかず一進一退の大決戦となった。

この時神代長良が采配を振りあげて、佐賀勢に襲いかかった。龍造寺勢は陣の秩序が次第に乱れはじめた。長良は攻めるはこの時ぞと大声で檄をとばした。神代勢は勇み立って攻め進んだので、佐賀勢は愈々乱れだし神代軍の勝ちとみえた。

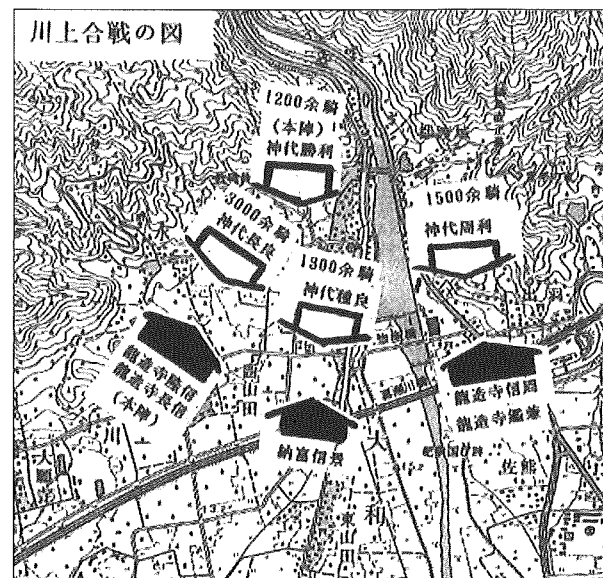
宮の前の兵部大輔種良の陣へは、龍造寺の先鋒納富但馬守信景が近づくと同時に合戦が始まって、両軍互いに入り乱れて死力を尽くして戦っていた。



神代種良の戦死地にある両軍の供養塔
(川上淀姫神社南方400m)

勝利は川上川西岸の狭い道を八段原を経由して、ようやく山内に辿りついた。父勝利を守りながら退去していた長良は龍造寺勢の追撃が厳しく、八段原の山中で自害を決意した。だが宿将神代備後守の必死の説得によりやく思いとどまり、更に北方の山内をめざして命からがら後退した。長良を必死で守衛していた豪勇西原左衛門も八段原で戦死した。

龍造寺軍は山内で勝利・長良父子を執拗に搜索した。この時勝利父子は上無津呂の淀姫神社の社人嘉村大和守舎種に匿われた。舎種は俄に村民を集めて大祭を開いているかのように見せかけ、神樂を奏した。追兵が来て探索したが勝利父子を見付け出すことができなかった。追兵は腹癒せに社務所に火



負い、やつとのことで山内に逃げのびた。

神代周利勢を散々に打ち破った佐賀勢の龍造寺信周・同鑑兼・小川大炊助信友以下の将は、川上川を東岸より西岸へ駆け渡って、納富信景の攻め口南大門に押し寄せ、これに合流した。兵部大輔種長の陣は西より納富信景勢に、東よりは新たに龍造寺信周勢に挟みうちされて苦境に立った。種長も奮戦したが、ついに宮の前御手洗橋

双方互角が、神代勢優勢へと展開し始めたこの状況のなかで、勝利にとって重大事件が勃発した。川の東都渡城原に陣する神代周利勢へ佐賀勢がまっしぐらに攻めてきたので、周利の軍勢もこれを迎え討とうとした時周利が味方の者の裏切りで刺殺された。周利勢は混乱した。周利を殺害した者の氏名等は詳しくは史書には出ていない。想像するに周利軍には多くの新参者がいたことが記載されているので、この中に龍造寺方に内通した者がいたのであろうか。周利を失ない、しかも新参者が多かった周利勢は互いに警戒して心が一致せず、大混乱に陥った。広瀬三河守・古場常陸守・杉山次郎右衛門以下多くの士卒が討死した。西川伊予守は深い庇を負い、家人に背負われて名尾まで逃げのび、ようやく鳥羽院の館にたどりついた。八戸宗暘も庇を

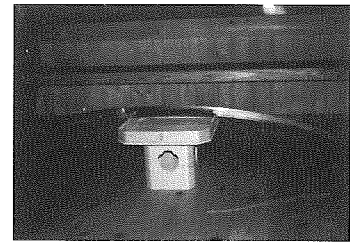
(六) 神代長良と今山合戦

を晴らそうと密議を凝らした。目をつけたのが鳥羽院城主西川伊予守であった。永禄五年（一五六二）八月下旬、伊予守は三瀬長門守安家の嫡男三瀬又兵衛に勝利殺害の陰謀を密かに語った。又兵衛は父に打ち明けた。九月九日、三瀬城で開かれた重陽の節句の宴の時に、逆に伊予守を討ち取った。さらに、腹巻伯耆守も一味であることが判明し、館を襲撃し一族・家来とも討ち取られた。

勝利父子が彼杵郡波佐見から漸く山内へ帰還して日数も経ておらず、また、川上合戦で多くの武将を失っている状態であるから、隆信勢の不意討ちも十分に考えられる状況であった。特に西川伊予守を誅伐した後、佐賀の方から何の沙汰もなかったため、愈々備えを固くして龍造寺方の出方をうかがっていた。だが永禄五年（一五六二）、隆信の使者が山内へ来て和議を申し入れた。

去年川上ノ合戦ニ隆信公大利ヲ得、御父子退去アレバ山内ハ我有ニシテ以前ノ長野御還住ニ懲リテ、形ノ如ク代官ヲ置キ今ハ心安シト思フ處ニ、目前ニ又御還住在テ旧領素ノ如ク治メラルコト、実ニ感心セラル、處ナリ。向後ハ互ニ誓約ヲナシ人質ヲ取替シ、縁辺ノ組ニ度違変無キ様相堅メ、合軀ノ思ヲ成シ申サン。若又此儀御同意ナクバ重テ有無ノ一戦ヲ致スベシ。但シ其方ヨリ御取掛ケ無ク御領内ニ佐賀ヨリ手指申聞ジ

〔神代家伝記〕



神代勝利が淀姫神社（上無津呂）に奉納した刀

を放ったという。神代父子は舎種の計略によって無事であった。勝利は社人嘉村舎種を通じて、淀姫神社に佩刀二振を奉納した。同社は宝刀として大切に保管していたが、二刀のうち小刀は終戦直後に盗難にあった。残る一刀は国次の銘があり、長さ六九・六センチ、反り二・二センチである。この刀は現存している。勝利はさらに同社に田七町五反余を寄進して、神代家鎮護の神として仰いでいる。

隆信は於保原（現大和町大字池上）に全軍を集め首実検をした。また、捕虜にした神代方の武将の首をはねさせた。そしてここに首塚を築いて弔った。首塚は千人塚と称されている。首塚は大和町池上の林業試験場に残存している。

神代勝利は三瀬城に一旦退いたが、再起を期して上松浦に落ち、更に杉山の住人小副川四郎五郎の所縁の者が大村領の彼杵郡波佐見村にいたので、勝利一族は大村氏を頼った。大村純忠は家臣の朝長伊勢守をつけて扶持した。一方隆信は神代領を没収し、空閑光家を久池井村（大和町）において、山内の迎えとした。

隆信は山内武士を自ら投降させ、難所での戦いに役立てる方が得策と考えて、降伏を誘う作戦をたてた。しかし、勝利の仁徳を慕う山内武士は大義を守り、ついに隆信に降ろうとしなかった。山内武士はひたすら勝利の帰城を願い、旧好の浪士達は密かに語らってその方策を練っていた。

漸く機熟して永禄四年（一五六二）十二月中旬、中村宅岐守父子は麻那古の龍造寺方の代官田中兵庫助を夜襲して討取った。ついで各所の龍造寺方の代官を逃亡させたので、勝利は三瀬城に帰還した。

勝利討伐に執着する隆信は、山内の将士の中で勝利に謀反をおこす人物を誘い求めて味方につけ、旧年の恨み

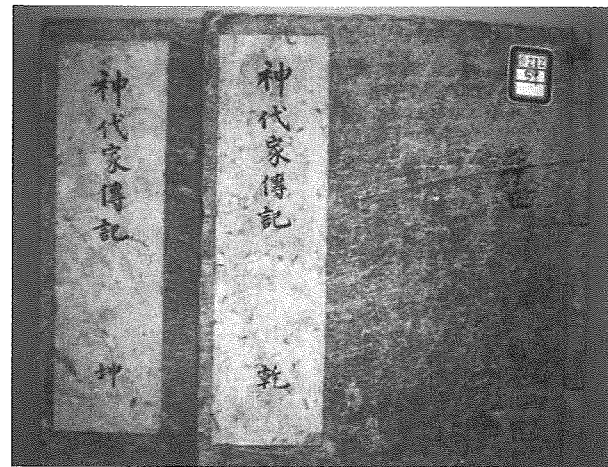
神代・龍造寺の和平が成立してからは、三瀬と佐賀では地理的に離れすぎているので、折々の交際に不便であったので、勝利父子の居城を里近い所に築くことになった。勝利は永禄七年（一五六四）畑瀬山に築城し、家督を嫡男の長良に譲って隠居した。長良は千布の土生島館に居を構え、それぞれの城に居住した。

勝利はこの和平後、小副川の大野原の西、須田山との境の高原という山に城を築き、松瀬・名尾・梅野の三氏に交代で城を守衛させた。

と答えた。隆信が勝利の意見のように進めたところ、案の定各々の心が離反し、一九人の中から隆信に逆心をいだく者が出たので、小城郡芦刈の近くでこれを誅殺した。後に鍋島直茂がこの件を聞いて、勝利の知略に富んだ計略に感心したという。

そうと企てていた。隆信がこれを知り、今度の和平は神載の上の誓約であるからと、自ら山内へ急報した。勝利はこの一九人を討ち果たすため、精兵七〇〇騎を従えて佐賀に赴き、隆信と対面した。隆信は勝利に対して、直ちに一九人を討ち果たすことは堪忍してもらいたい。自分達の手で討伐すると申し出た。ただ、自分達の意見を聞き入れない場合はどうすればよいかと、勝利に意見を求めた。勝利はこの問いに、彼ノ十九人ノ面々ニ領地ヲ加恩シアルベシ。其多少ニ依テ必ス利ヲ食ラン。然ラバ他ヲ情ムノ禍出来ンガ、此ノ如クシテヨク内ヲ伺ヒ玉ハバ、後ニハ十九人自カラ心隔々ニ成ルベシ。惣ジテ多数党ヲ結フコトハ成敗ノ妨ケト成ル者也。サレバ此術然ル可キカ

（『神代家伝記』）



『神代家伝記』（鍋島文庫）

と丁寧申し入れた。

勝利は早速重臣を集めて評議した。勝利は「只今隆信猛威ニ募り近国迄ヲ入レ山内ノ勢二十倍セリ。然ルニ彼方ヨリ手ヲ入レ、是程ニ和平ヲ乞ハルベキコトニ非ラズ」（同伝記）と考え、「所詮神代ト和平シ当国他国ノ弱兵ヲ心安ク從ヘテ大身ニ成リナバ、勝利剛強ナリ共隆信カ軍門ニ降ルヨリ外有マジ」（同伝記）と計算していると判断した。しかし、今は隆信軍を滅ぼすことはおぼつかない。「今ハ幸ヒ隆信力乞ニ任セ真実和平ヲナシ、領地広クシテ時ヲ待ツベシ」（同伝記）との結論に達した。

勝利と隆信は互いの神文の誓紙を取り交わし、当時四歳になる長良の娘と、隆信の三男鶴仁王丸（善次郎・後の後藤家信）を縁組させ、龍造寺胤久の娘を隆信の妹として、勝利の内室として興入こいれさせたいとの申し入れがあった。勝利は長良の娘と鶴仁王丸との縁組は承諾したが、胤久の娘の興入れについては自分が老齢であるから受け入れようとはしなかった。だが今度の和平は全く他意がなく、山内への人質の意であるからとの龍造寺側より強い要望をうけて、勝利も承諾し山内への興入れがあつて、山内と佐賀との和議が成立した。

ところが、この和談に反対する隆信の一族幕下の一九人が、一味同心して隆信にも知らせず密かに神代家を倒



千寿丸の墓塔（下合瀬の万福寺、左側）

龍造寺方の追撃をうけたので、筑前飯場の曲淵河内守房前や糸島郡飯盛の小田辺紹叱両氏に匿つて欲しいと依頼したが、佐賀に近く、領内も狭いと婉曲に断つてきた。そこで那珂郡岩戸の鷲ヶ岳城主大津留入道宗秀を頼り、同郡戸坂に置かれ扶持された。また、大友氏の老臣戸次伯耆守鑑連も、長良の難儀を聞き、大友宗麟に話して、時々戸坂に長良を見舞つたという。こうして長良と大友氏との提携も生まれた。

長良は菩提を弔うため田地八町を寺に寄進した。石塔は今も万福寺に残っている。

神代家にとり不幸が続く折、同年（一五六五）四月二十三日、隆信は納富但馬守と龍造寺美作守の両名を千布の城に遣わして弔問させた。納富但馬守ら両名は長良に対して、勝利の死去や長良の嫡子の死去にお悔みの言葉述べた。そして、善次郎（鶴仁王丸）と縁組していた姫が死去されたので、「長良公御一族ノ中ヨリ幼少ノ姫ヲシテ、以前ノ如ク重テ縁ヲ結び申スベク、猶別心ヲ存セラレザル旨、今又改テ誓書ヲ進ラセ候」（伝記）と伝えた。そして、明後日を期して長良からの返書を求めた。

しかし、隆信はなんと翌日の夜明け前に納富信景を先陣として兵を向け、土生島館の神代長良を奇襲させた。長良は「キタナキ隆信ノ振舞哉。是程ノ不義ナルベキトハ思ハスシテ、今此難ニ逢フコト唯運命ノ尽キ果テタル處也」（伝記）と言い残して、畑瀬城に逃れた。長良は龍造寺方の追撃をうけたので、筑前飯場の曲淵河内守房前や糸島郡飯盛の小田辺紹叱両氏に匿つて欲しいと依頼したが、佐賀に近く、領内も狭いと婉曲に断つてきた。そこで那珂郡岩戸の鷲ヶ岳城主大津留入道宗秀を頼り、同郡戸坂に置かれ扶持された。また、大友氏の老臣戸次伯耆守鑑連も、長良の難儀を聞き、大友宗麟に話して、時々戸坂に長良を見舞つたという。こうして長良と大友氏との提携も生まれた。



神代勝利の位牌（宗源院）

ところが勝利は同年の暮から累年軍労のためか気分がすぐれず、日を追って寝食もすまなくなり衰弱していった。一族郎党に至るまで神仏の加護を祈り、医療にも手を尽したが、その効き目もなく病状は悪化した。膈（胃がん）であつたという。とうとう翌同八年（一五六五）三月十五日の夕方、畑瀬城で永眠した。享年五五歳であつた。遺体は城の南西の畑瀬山宗源禅院に葬られた。法名は「前和州太守覚賢利大禅定門」で、石塔は今も宗源院の堂宇の背後にある。石塔は幅一・八メートル、高さ一・五メートルの切石で塚を盛り、石の玉垣を廻らし、五重塔が真中に立ち、四面に日月星辰の四字を彫っている。左右に並ぶ十数基の小塔は侍臣や同院の住職の墓である。宗源院は勝利存命中の開祖で、太陽山玉林禅寺（大和町久池井）の末山で、本尊は薬師如来である。開山は天隅和尚といい、永禄五年に死去している。その後閑室という僧がこの寺に住し、年数の新しいのを嫌って開山を天隅和尚よりも古い妙園和尚に改めたという。妙園和尚は杜山の伽葉山清流寺の開山で、時代が遥かに古いからである。

大黒柱であつた勝利が他界して神代家が悲嘆にくれている最中、翌四月には長良の嫡子千寿丸一一歳と同姉妹七歳（鶴仁王丸との縁組が成立）の二人が天然痘で、三瀬城近くの河内谷の屋敷で急死した。長良はじめ奥方や家臣の者たちも、どういう因果のめぐり合わせかと歎き悲しんだ。千寿丸は幼少より父長良も習つた合瀬山万福寺の虎山和尚という博学雄才の老僧を師として、手習い学問に励んでいた。遺体は姉妹とともに万福寺に葬り、

長良は天津留宗秀を頼り、同年四月から八月まで戸坂に蟄居していた。その間に龍造寺隆信は再び山内に代官を置き、以前よりも守りを固くした。それでも山内の諸士は龍造寺氏には仕えようとはせず、浪々の身となっていたが、どうにかして長良を再び山内に安堵させようと、城奪還の時期を狙っていた。

同年八月旧民が一揆を起こしたとの情報を得た長良は、小田辺紹叱、高祖城の原田了榮、曲淵城の曲淵房資や大津留宗秀に加勢を要請し、同八月二十日に龍造寺方の山内代官（番将）を追払って、山内の旧領を回復した。そして三瀬城を再興して、更に堅固な城に改築した。

長良は千布城（土生島砦）で納富信景に謀られたことを無念に思い、その仇を討とうと策略をめぐらした。信景の所領である千布（現佐賀市金立町）・和泉（現佐賀市久保泉町）等へ流れる水路を堰止めさせた。同九年四月から五月にかけては、折しくも旱魃となった。信景は嫡子信純に下徳永（久保泉町）に添うて水路を巡見させたところ、信純は長良の伏兵に襲われて討たれた。信景が部下を従えて馳せつてみると、長良は家臣を率いて出陣していた。信景は長良を攻めて、一時は高木・平尾（現高木瀬町）に追い詰めたが、長良に盛り返され信景は佐賀に退いた。長良は北村・五領（大和町）、高木（高木瀬町）、測・藤木（兵庫町）の地を攻略して、三溝（神野町）に攻めこんだため、現佐賀市の北部までを神代領とした。

永禄十二年（一五六九）豊後の大友義鎮（宗麟）は龍造寺隆信攻略の大軍を起した。自身は筑後・高良山に本陣をおき、戸次鑑連・臼杵鑑速・吉弘鑑理の三宿老を龍造寺討伐に向わせた。神代氏が龍造寺氏と累年の不仲であることを知っている大友義鎮は、事前に神代長良に内通し、今度の龍造寺攻めの案内役を依頼してきた。

神代長良はこれに応諾し、自身は川久保南方の竹下まで出馬した。神代兵庫守を目代（代理）として神代軍の大將と定め、老巧の勇士古川佐渡守入道眞清を軍奉行として、松瀬・一番ヶ瀬・栗並・杉山・関屋・藤瀬その他の諸兵合せて一〇〇余騎が出陣した。戸次・臼杵・吉弘らとの合戦の手筈や合言葉などを確認した上で、先導役を勤めることになった。

神代勢は長瀬村の南無堂具留里の北方まで押し出して陣を取り、大友氏の軍將吉弘鑑理は、神代領域と長瀬の間に透間なく陣を布いた。四月六日大友勢は神代勢の案内により五領・長瀬・蛸久に移動し、多布施に迫り、神代勢の一隊は三溝・神野・愛敬島・大財まで打ち入った。大友勢と龍造寺勢との合戦が、各所で繰り広げられた。四月十七日、肥後の城親冬が双方に入って和平を談合したので、隆信は承諾した。大友方の戸次・吉弘の二将も合戦を止めて、長瀬・蛸久の陣を引き払い川上まで退いた。隆信は納富信安を臼杵鑑速のもとに遣し、互に人質を取り替し和平することになった。隆信は人質として秀島賢周を出した。

この一戦で神代軍の働きが目覚ましかったことの委細を、臼杵鑑速が高良山の太友宗麟のもとに注進した。宗麟は非常に喜び書簡で感謝の意を伝えた。書面には、

以行敵数輩被討捕被得勝利之由、感悦無極候、今度御心懸之次第取鎮何様頭候旨ニ、無申迄候弥可致励、忠事可為祝着候、委細猶臼杵越中可申候 恐々

六月廿日

宗麟判

神代刑部大輔殿

隆信と一旦和睦した大友宗麟であったが、翌元亀元年（一五七〇）三月中旬、再び大軍を促して高良山に陣を

心怠りなく構えていた。

以上のような起請文を取り交わしたものの、隆信は再三にわたって誓約違反を犯しているので、長良はなお用

- 一、奉対豊州為龍造寺隆信不可有別心之事
- 一、到神代長良為龍造寺隆信以前之宿意差捨、不可有悪行悪心之事
- 附り、長良隆信間自然於有識者謀書者、無表裏実否可尋明候ハ、勿論長良家来衆隆信被官百姓之間ニ、喧嘩口論雖有之憲法之取沙汰可申談之事
- 一、申談御領地聊不可有還変之事、附り、長良家中之仁等隆信被官可罷成之由雖申候、致許容間敷候之事

再拜々々敬白天罰起請文之事

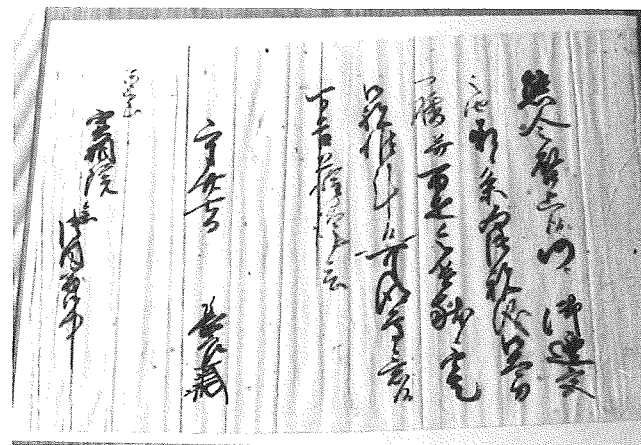
今山合戦が落着いたので、隆信は大友方の与党の討伐に取りかかった。神代長良は熟慮の末、神代・龍造寺・大友の三家の和平を成立させようと、大友方へ和平調整のために使者を遣わした。大友宗麟もこれに応じて隆信へ使者を送った。こうして三家は和平の誓約を取り交わした。隆信より長良への誓紙は次のような文面であった。

をそえて佐賀攻撃に向かわせた。親貞は八月十七日に今山（大和町久留間）に進み、赤坂山に本陣を置いた。

今山の陣を奇襲することになった鍋島信生（のち直茂）は僅かな精兵を率い、十九日の夜佐賀の城を出た。鍋島の新庄より嘉瀬川を越えて、小城郡藤折（現三日月町）に着いた時は二十日になっていた。藤折の東の辺から山に登り、未明（午前六時頃）に大友陣の赤坂山の北方から親貞の本陣を奇襲した。八郎親貞が討ち取られたため、大友勢は総崩れとなった。神代勢も軍奉行の古川佐渡守入道真清が戦死した。杠重満も川上まで逃げたが、ついに討死した。その他多くの将兵が戦死した。大友方についた神代長良の作戦は失敗した。

へ感状が出された。

六月十三日、長瀬の南無堂具留里（天神社の周囲）で神代勢と龍造寺勢の衝突があり、龍造寺方は利なく多くの死者を出している。しかし、佐賀城がなかなか落城しないので、宗麟は大友八郎親貞を大将として、新手の兵



神代長良書状（『実相院文書』）

張り、戸次道春・高橋紹運を先陣として肥前に侵入してきた。戸次鑑連は佐賀の東の口、吉弘鑑理・臼杵鑑速は佐賀の北の口に布陣した。

神代長良もこれに応じて川久保まで出張し、大友勢への加勢として神代兵庫守を大将として、古川佐渡守入道真清を軍奉行とした。それに三瀬内蔵助武家・杠左馬大輔種満・国部和泉守・小副川藏人・藤原善四郎・中村壱岐守・田中安芸守・秀島惣兵衛・陣内九郎左衛門以下の精兵八〇〇余騎を出陣させた。その他東肥前の小田・高木・江上・犬塚・横岳・馬場・筑紫・綾部・本告・姉川の諸将も大友方についた。更に西肥前の平井・後藤・鶴田・有馬・大村・西郷の諸氏も龍造寺攻撃に加わり、佐賀西の口に布陣した。

三月十七日には神代勢と龍造寺勢との衝突が、小城表で発生した。この時神代方が首級二八をあげた。これに対し宗麟から長良

天正元年（一五七三）十二月二十九日、龍造寺隆信は秀島九郎左衛門を使者として三瀬に差し向けた。しかし、

その日は大雪のため秀島は杠山清流寺に一泊して、翌天正二年正月元旦三瀬城に到着した。使者の秀島は「先年三家一時二和睦仕候上ハ、聊隔心スベキニアラズ、彌々志ヲ同フシテ近国ヲ打チ磨ケ所領ヲ割分スベシ。サレバ来ル二日ニハ松浦郡唐津表へ赴キ、草野鎮永ヲ討ツベシト思ヒ立チ罷向ヒ候。長良公モ御馬ヲ出サレ御協力候ヘカシ」（伝記）と、隆信の言葉を伝えるとともに、さらに隆信から長良への誓紙を渡した。

その誓紙には、

再拝々々敬白天罰起請文

一、対神代刑部大輔長良為龍造寺隆信尽未来際不可有相違之事

一、到長良申談領地為隆信一献向後不可違変之事

一、長良隆信自然於有識者無表裏以実名尋可申之事、並如何体密議承候共致口外間敷之事

一、長良隆信間於有惡說申散者質人差遣存分可申入事

一、如斬申談候上者対長良為隆信雖有分別難題申掛間敷事、附長良家中隆信之家中万一喧嘩口論有之者憲法可申談事

右之條々今違犯者（以下略）

長良は早速、一番手として神代周利（勝利の弟宗光の孫）・同弟篠木右衛門佐・畑瀬右馬助・栗並治部少輔・合瀬掃部助らを唐津表へ差し遣わし、隆信の先陣に加えた。二番手として神代長良自らが、同弟惟利・同弟鎮利・神代彈正らを伴って出陣した。

長良は藤ノ瀬・麻那古・滝川を経由して進んだ。一方隆信は小城岩蔵から石体越えで市川を通り、唐津領内の池原・滝川を経て進み、その日の晩に両者とも五反田（現浜玉町）に着陣し、両軍の戦略を定めた。隆信と長良

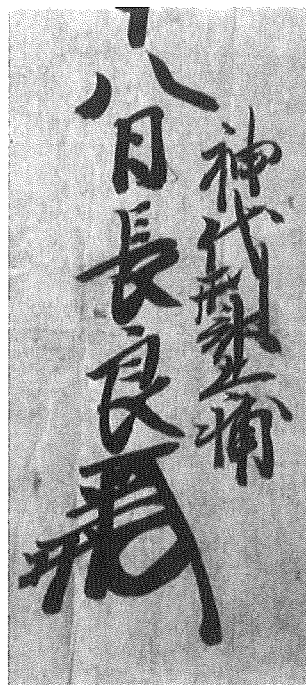
の両勢は、草野鎮永勢を弓・鉄砲を用いて散々に攻め立てた。翌三日ついに落城して、草野鎮永は筑前国糸島郡の二重嶽に落ちのびた。

戦い終って滝川の平原という所で、長良と隆信は初めて陣中で対面した。長良は用心のため父勝利以来の腹心の側近山伏阿含坊・杠太郎右衛門の両勇士を伴い、隆信は百武志摩守信兼・成松遠江守信勝らを伴って語り合い、盃を取り交わした。長良は領地について草野領の草野七山（馬川・滝川・荒川・仁部川・苅川・藤川・木浦木川）を、隆信に要望した。だがこのうち仁部川は鴨打陸奥守胤忠に約束しているので、隆信がいただきたいと申し出た。その替地は佐賀で一ヶ所と申し出たので、長良もこれを承諾した。長良は草野六ヶ山を領有したので、神代家の代官をおいて支配した。

筑前の原田氏と神代氏は元来親しい間柄であったが、草野鎮永はもともと原田了栄の嫡子であったので、了栄は長良のこの処置を憤り、鎮永のため軍兵を出して草野七ヶ山を取り戻そうと図った。

天正四年（一五七六）二月十五日早朝、前日夜半密かに三瀬の西、合瀬山の宇奈貴礼に潜んでいた原田了栄配下の兵七〇〇余騎が急襲してきた。不意をつかれた神代勢は力戦したが及ばず、若干の敵を討ったが、枕を並べて討死にした。原田勢は二手に分れて引揚げようとした。その一手は上無津呂筋・長野峠越えの経路である。このグループには大將が二人いて、道々の村里に放火し民家を破壊しながら、無津呂の上之浦に差し掛かった。

無津呂の住人嘉村讃岐守の嫡子和泉守は、近辺を駆け廻って兵を集め、筑前勢に襲いかかった。原田勢の大將二人はともに討ち取られ、その他多くの将兵も戦死し、残兵は散り散りに筑前に逃げ帰った。嘉村和泉守は討取った首級を持って三瀬に登城した。長良は深く感悦し、手厚い褒美を与えた。



神代長良の花押

長良は宇奈貴礼の合戦で、不意に謀られて歴々の家臣を討たれたことを無念に思い、まもなく、嘉村和泉守・同安芸守に強兵を添えて原田領に乱入させ、諸所に放火して暴れさせた。

その後、原田了栄の二男親種が龍造寺隆信に降伏したので了栄は大いに怒り、親種を討

とうとした。親種はこの旨を隆信に伝えたので、隆信は加勢のため筑前の井原まで出向いた。この時長良も杖立峠を越えて、筑前・内野の大丸に着陣した。隆信は長良の出陣が原田了栄との和解の契機になるかも知れないと疑い、一旦佐賀に戻って軍勢を大幅に強化して、再び筑前に入った。そして大津留・高橋・小田辺・原田各氏の諸領に攻め入り、この地を征服しようとした。

長良も原田領に攻め入り猛威を振ったので、了栄はついに隆信・長良に和睦を申し入れた。両氏は了栄を許し、三氏の和平が成立した。了栄から長良に出された誓紙には次のようにあった。

再拜々々敬白天罰起請文

一、長良了栄間神載之事度々取替シ候上ハ、相互ニ事新シク申ニ及ハスト雖、不及申鎮永任御裁判弥対長良、向後不可有別儀事
一、自然愚説等於有之者互ニ糾実否可申談事

右之條々於令違犯者(以下略)

これ以来、筑前の早良川から東は海道を境にして、俣堀・次郎丸・退毛原(野川原)等をはじめ、その他数ヶ所が神代領になった。その目印に築いた塚は永く残り、地元民は肥前領と呼んだという。

また、後に原田氏が滅びると、その家臣が多数神代氏を敬慕して山を越えてきて、家臣として永く仕えた。

(七) 家良の養子と長良の死

天正・弘治から永祿の頃まで、肥筑の間には自立の大名が割拠し、抗争・兵乱が連続した。千葉・少貳氏は先に衰退又は滅び、後には大友・龍造寺・神代の三氏が雌雄を争ったが、元龜年中に三家の和平が成立してから、天正の半ばに漸く静穏になった。

長良は神代家の末永い安泰を考えて、一族家臣を集めて同家の将来について相談している。『神代家伝記』には、

亡父勝利公ヨリ以来諸方ノ敵ト取合シ中ニ就テ、龍造寺ノ大敵ニ対シ数度ノ決戦アリト雖、勝敗区々ニシテ五十年ニ及ヒ家業ヲ墮サス、然レ共父ハ逝去御座在リシ、吾又近年病起リ預メ短命ナルヲ知レリ。去レハ吾ニ末ヲ保ツベキ男子ナク、此上ハ当家永ク相続クコトヲ本意トシ、且ハ多年当家ノ為忠ヲ尽セシ各安穩ナラムコトヲ思フノミ、昔ク当世ノ事ヲ鑑ミルニ龍造寺隆信大家トナリテ、近国ヲ治メ其子弟ヲ養テ家ヲ継セント思ヘトモ、元来隆信ハ仁政ヲ知ラス。専ラ謀計ヲ恃テ残害ヲ事トス。僻令大国ヲ保ツト雖長栄スベキ器量ニアラズ、竊ニ聞ク鍋島飛騨守信昌(のち直茂)ハ、智勇具ツテ仁愛又深シ子孫必ス繁栄スベシ、宜シク其子弟ヲ養子トシ、吾娘初菊(天正五年丁丑誕生、寛永十九年壬午卒去。法名花顔栄春大姉ト号ス)ニ嫁セシメ、家ヲ続カ



鍋島直茂の花押

長良が鍋島信昌（直茂）の子弟を養子に迎えると決意したので、この件を急ぎ佐賀に申し入れることで評議は一致した。そこで、天正七年（一五七九）三月下旬、三瀬大蔵を使者として鍋島信昌（直茂）の館に遣わし、

『神代家伝記』はすべて写本である。同伝記は鍋島藩政下に、神代家に鍋島家より養子という形態をとりながら、多くの血が流れこんでいた時期に記述されたものである。当然龍造寺氏より鍋島氏を賛美する意図が、少なからず働いていたことは考えられる。

ところで、『神代家伝記』は神代家を知る上で貴重な史料である。同伝記は江戸中期の享保年間（一七一六～三六）に、神埼郡三瀬村三瀬の長谷山観音禅寺（三瀬氏の祖野田周防守大江清秀の再興）住職の泰山が、記録したものと推測される。江戸時代の神代氏は川久保邑の邑主として、藩主鍋島家の親類同格として厚遇されている。しかし中期になると、神代家に鍋島氏の血統が多く流れこんだ。そこで邑主神代直方（旧地の山内に長谷山観音寺を再建させると共に、住職の泰山に命じて神代氏の業績を記録させること）や神代家の血統を正す目的で、この家伝をまとめさせたと考えられる。部分的には明らかに後世の加筆と思われるところもある。また、現在流布す

（直茂）こそ将来を仕切る人物であることを予見して、直茂の子を養子に迎えたいと望んだ。この史実は安国寺恵瓊が織田信長と木下藤吉郎（豊臣秀吉）の未来を予見したことと実によく似ている。長良の先見の明には感心するしかない。

『神代家伝記』によると、長良は龍造寺隆信の子弟ではなく、隆信の一部将でしかない鍋島直茂の子弟を養子に迎えたいと申し入れたとある。長良の意見に対して、全盛期にある隆信の一族から養子を迎えるべきだとの意見や、長良は後継ぎの男子が誕生しない年齢ではないので養子は時期尚早であるとの考えも出ている。しかし、長良は男子が生まれるまで待てる時期ではないと述べている。結局鍋島直茂の子弟を養子に迎えることに決定した。長良が破竹の勢いで伸張する龍造寺隆信の勢威を目前にながめながら、その命運の永くないこと、鍋島信昌



鍋島直茂（信昌、信生）画像
（佐賀市高伝寺蔵）

シメント思フ也。当家ノ吉凶君臣ノ安危ナレバ、各ノ存念如何心底ニ残スベカラスとある。つまり、長良は自分には家督を継ぐ男子がいない。しかし、神代家が永く続くことが望みであり、又、当家に忠勤を尽してくれた家臣の安穩をはかるために、大家より養子を迎えたいと考えた。そこで、隆信の子弟より養子を迎えて家を継がせようとも考えたが、隆信は仁政を知らず、自ら謀計を企てる性格であるから、永く栄える器量とは考えられない。聞くところによると、鍋島直茂は知勇があつて仁愛も深いといわれているので、その子弟を養子として迎え、娘初菊を嫁がせて家督を

前記の趣旨を申し入れた。信昌（直茂）はその頃までは、隆信の母方の縁者ではあったが、さほど大身でもなかったので、隆信公のご子弟を望みなら幸いであるが、鍋島一家からなら差し控えたいと固く辞退した。しかし、長良の希望は強く、三瀬大蔵に精根を尽して所望するようにいい含めて、重ねて使者として遣わした。重々の使者を迎えた信昌（直茂）は、たつてのお願いに辞退する言葉もなく、隆信の了解を条件として要望に応ずることにした。しかし、その当時信昌（直茂）には男子が誕生していなかったので、自分の世継として養っている弟小川武蔵守信俊（信貫）の三男犬法師丸を養子に出すことにした（翌天正八年、直茂に嫡子勝茂が誕生する）。隆信はこのことを聞いて大いに喜び快諾した。神代家は吉日を選び、同年四月四日悦びの使者として神代弾正・神代対馬守を直茂の館に遣わし、今後のことを堅く誓約した書状を差し出した。

覚

小城山内古湯山八町

一、妻にて候者之事

同藤ノ瀬山四町

一、娘之事

一、我等江相付候被官之事

以上

四月四日

長良判

信昌参

信昌は両使に対面し、すべて長良の指図にまかせることを述べ、神代家に対しても永遠に違変なく、いささかも疎意がないことを申して、次のような返書を渡した。

蒙仰三ヶ條對彈正江茂申渡候、又其意分茂到御両使申述候為御存知候 恐惶謹言

卯月五日

信昌判

長良老

長良は同年八月二十四日、重ねて神代対馬守・神代弾正の両名を佐賀へ遣わし、犬法師丸の山内迎えの最終的意志を伝え、互いに取り交わした。

一、養子之事、信昌年若ク長良姫ト嫁妻之事不可有相違事

一、隠居ノ時親以来様々ノ事付万一実子出来候ハバ、長良格護之分可被仰付事

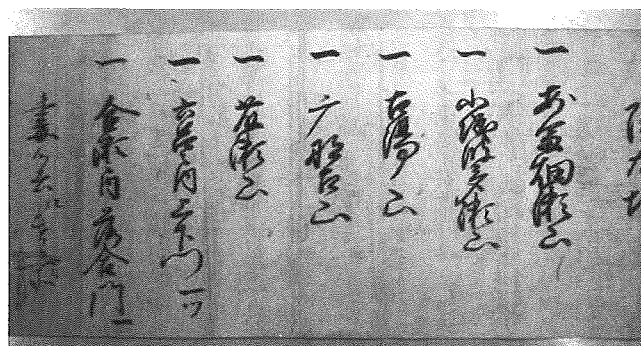
一、親類并不依譜代ノ仁、長良領地等如為申付、万ツ不可有改易

以上

右以神文申談

長良判

信昌もこのことを納得して、長良の意向を汲んだ内容の血判の誓紙をしたためて両使に渡した。誓紙は次ぎの



「鍋島信昌（直茂）所領目録」より（『杠家文書』）

通りである。

再拝々々敬曰天罰起請文之事

一、対神代長良為鍋島飛驒守信昌、盡未來際不可存惡心惡行之事

一、長良御息女與犬法師丸相嫁候儀、向後不可相違之事、付長良御実子御座候時者、長良為御隠居、御格護分之儀無相違、可有御進退之事

一、不依長良御親類御譜代衆、領地等儀如為仰付置、万為信昌不可有改易之事

右條々於令違犯者

神文

鍋島飛驒守

信昌 判

天正七年八月廿四日

神代刑部大輔殿

その後、双方の準備が完了したので、八月下旬、犬法師丸お迎えとして三瀬大蔵をはじめ、大勢のお供の武士が三瀬から差し遣わされた。信昌（直茂）は丁重に饗応した。三瀬大蔵には秘藏の会津の長刀を引出物として与えたという。こうして犬法師丸は式礼を厳重に済ませ山内へ入った。佐賀からつけられたお供は、まず御守役として田中善右衛門、その他石井孫兵衛・武藤善兵衛（丹後守）・馬郡孫左衛門・太田源内・久納八助・矢作小右衛門・木下小兵衛らが従った。彼らは神代家から付けられた諸将とともに犬法師丸を守衛し、ことに三瀬大蔵らの郎従三〇人が後に続き、路次の行列は辺りを払い、実に壮観であったという。

犬法師丸は成人して名を六兵衛と改め、初菊と結婚し、神代家の家督を継いで神代大炊助武辺朝臣家良と号した。
おおいのすけものべあといえよし

ところで、この年に発給された長良の田地寄進状が新しく確認された。それによると、

一、合瀬山之内、権野

道之上貳百文田

為千壽丸茶湯

免、於萬福寺

末代令寄進候

状、如件

天正七年己卯七月十八日

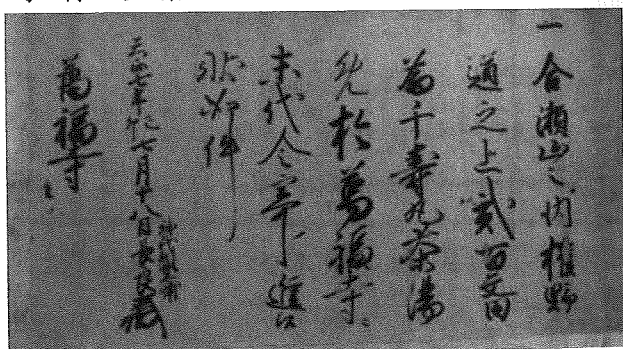
神代刑部大輔

長良 花押

萬福寺

参

とある。この文書は、祖父勝利を追うように永禄八年（一五六五）に亡くなった千壽丸が葬られている下合瀬の萬福寺に、長良が子息千壽丸に供える茶湯経費用のため、合瀬山の地の式百文田の土地を萬福寺に寄進したものである。この文書は福岡市今津にある勝福寺に所蔵されていた。今は福岡市立博物館に寄託されている。萬福寺に発給した寄進状が、どうして今津の勝福寺



神代長良の田地寄進状（『勝福寺文書』）

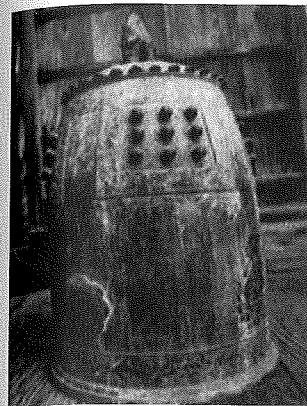
富士町域は大部分が山林で耕地は少なく、さらに耕地は山間のやせた地である。古代から中世にかけて、林野は動物の狩猟の場として、山菜の採集の場として、また食糧増産のための焼畑の場として、自給的な生活を支える重要な役割を持っていた。古代よりみられていたと考えられる焼畑の共同作業により、山々は山腹まで焼畑が広がり、谷ぞいの湿地などにいくらかの谷田が営まれていたと考えられる。

鎌倉時代から室町時代にかけては、農民たちが耕地を開発する技術と灌漑土木を体得して新田を開発し、谷田・棚田が多くみられるようになったと推測される。水田も川辺の低湿地だけでなく、徐々に山腹にまで広がっていったと思われる。しかし、平野部に比べ大幅に労力を要するし、気候も冷涼なため米麦などの生産量は少なかった。米麦以外では稗・粟・豆等の穀類やこんにゃくいも・里芋・かぼちゃ・からいもなどの野菜類を屋敷ま

(八) 山内の産業と生活

山龍護院の住職であった海^{かい}庵和尚を中興の開山と定めた。観音寺は神代家由緒の寺であったが、昭和三十八年（一九六三）大雪の中失火によって全焼した。唯一つ「寛文七（一六六七）藏以丁未十二月吉日、神代大和守武辺朝臣直^{なほな}長」の銘入りの半鐘が三瀬・宿の公民館に保存されている。

長良の死後の神代家は、家臣が九歳にして家督を継いだ。家良が若年であったので鍋島信昌（直茂）が後見役となり、神代家の老臣神代対馬守周利を目代とした。



神代直長の銘入りの半鐘
(三瀬村公民館)

内屋敷で死去した。享年四五歳。法号は梁山宗異大禪定門である。亡骸は河内屋敷の東南に当る長谷山観音禅寺に葬られた。観音禅寺の創建は不明であるが、古くは天台宗の道場脊振山の末寺であったという。鎌倉期には杉神社の社務が同寺の僧を兼ねたという。鎌倉後期に三瀬に入山した野田氏（後に三瀬氏）が同寺を再興し、戦国期には玉林寺の末寺となった。本尊は観世音菩薩で、僧春日^{しゅんじつ}の作と伝えられる。寺は永く荒廃していたが、神代長良が再興し、当時杠

長良は父勝利の跡を継いで、天文の末から天正年間に至る三〇余年の間、戦^{いくさ}に明け暮れて休む暇もなかった。この間神代家は山内の領主として統治し、領民の信頼は絶対的なものがあつた。だが長良には病魔が忍び寄っていた。



神代長良墓碑（三瀬村山中、長谷山観音禅寺）

に所蔵されることになったのだろうか。恐らく萬福寺の住職だった者が、今津の勝福寺に移る際に、同寺に差し出されていた文書も一緒に勝福寺へ持参したものではないかと推測される。長良が発給した書状が、福岡市で確認されたことは幸運であつた。もしかすると神代氏が発給した文書が、福岡方面でまだ存在する可能性があることを示している。



権現山より雷山方面を望む

わりの菜園で栽培していた。副業としては木材・木炭・薪などが生産された。中世も後期になると、農業も多角化や集約化の傾向を強くした。集約化に伴って肥料が普及する。一二世紀ぐらいから肥料として草木の灰が用いられるが、中世の農業における草木灰の施肥は普及し、作付けの一・二ヶ月前に施肥を行うようになり、薪炭用だけでなく肥灰の資源として草木の確保が重要視されるようになった。もちろん速効性の肥料としては厩肥・人糞尿なども用いられた。刈敷や堆肥のため青草・肥灰を確保するために山地・山野の維持・管理は大切であった。

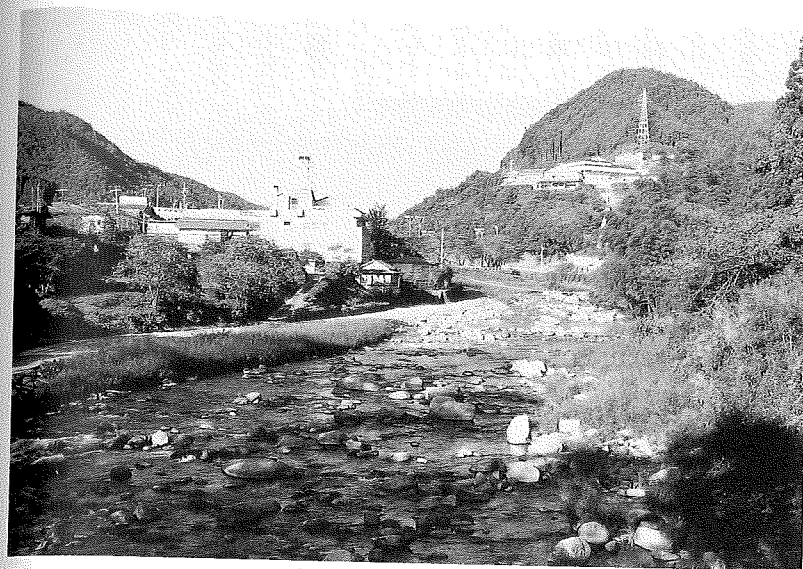
室町から戦国時代にかけて城郭（館）の築造や軍需資材の必要性から、建築用材は需要が急増し不足してきたので、戦国大名などは重要な森林などを直轄にして、その伐採を制限したり禁止するようになった。森林資源（建築用材）を保護することはもちろん、軍需品としての竹の増産と保護に努めるようになった。

肥前地方の中世における林野支配については史料に乏しいが、『佐賀県史料集成』の第七巻所収の『鶴田家文書』に若干出ている。第三号文書「龍造寺隆信書状」（年月不詳）をはじめ、第三号、三七号文書など一連の長信（隆信の弟で多久梶峰城に配置されていた）宛の書状によると、大友氏を敗退させた後、天正元年（一五七三）より同三年にかけて、上松浦地方

や武雄地方へ勢力を伸張するにあたって、「大河野」（現伊万里市）地方の材木を武雄の後藤氏の侵攻から守り確保し、長信に調達させ、多数の「夫丸」（人夫）を雇って、現武雄市の高橋（長嶋莊跡地）に集木させることを命じていることがわかる。隆信は「就爰許造作之儀」と材木調達の理由をあげているが、同二年ごろ隆信が小域内に草野氏討伐のため陣屋か城柵を構築するためであったと考えられる。このようなことは当然山内を拠点とする神代氏についても十分に推測されることである。

中世の富士町域の幹線道路については、江戸初期の国絵図によって推測するのが唯一の方法である。徳川家康は慶長十年（一六〇五）に諸大名に国絵図（慶長国絵図）の提出を命じた。当時の肥前国の慶長国絵図は現存せず、天保八年（一八三七）に模写したものが残っている。しかし、この絵図は大まかの道筋のみしか記入されておらず、詳しくは判明しない。正保四年（一六四七）も幕命により国絵図（正保国絵図）を提出している。これによると、嘉瀬川の右岸沿いに道路があり、八段原く内野を通り熊の川に至る。熊の川で嘉瀬川を渡って下小副川にはいる。同地より北上し、大野原集落の北側より山越えて畑瀬に出る道が幹線として描かれている。畑瀬から鷹の羽より栗並に至り、栗並から大串を通って東松浦郡へ道がのびている。栗並から北上して無津呂へ至る道もある。鷹の羽より藤瀬く合瀬に至る小道も書かれている。合瀬から三瀬峠越えて筑前に至る道がある。神代勝利時代には三瀬の宿に番所がおかれていた。他の峠筋にも小さい監視所があったことは想像できる。無津呂から北上し長野峠を越えて筑前に至る道と、西進して東松浦郡に至る道が書かれている。また、小城町岩蔵から石体集落を越えて、石体峠より市川に至り、市川より西北上して東松浦郡に至る幹線道が書かれている。これらの江戸初期の道は、中世に既に重要な生活道として利用されていたと推測される。

近世



古湯を貫流する嘉瀬川

以上のように中世を展望してくると、鎌倉時代より人々の活発な活動が展開されていた。山内に大きな影響力をもった勢力は、平野部と同じ少弐・千葉両氏であった。だが、一六世紀に神代氏が登場して、肥前の歴史で脚光を浴びる勢力に成長した。まさに神代氏は山内歴史の優れた創造者であった。

最後に、山内が厳しい自然環境や恵まない地理的条件にあつたにもかかわらず、山内の領民は自然や土地と共生していた。彼らは神仏の加護を願う深い信仰心を持ち、それを共通の支えとして、大地に根をはった逞しい生活を先祖より受け継ぎ、子孫に残していった。その伝統的生活習慣や文化は、今も脈々と確実に絶やされることなく守られている。

上
依
弘仁十二年三月弘法沙門
富山波佐佐良金吾等
白山左衛門出陣八葉九等
中央
欽
仁皇太子
十二皇子
関
大

下関屋 高野岳玉泉坊由来 (天明9年 32世 鏡辨書出)